# 金沢大学外国人留学生の日本語学習に関する調査報告

桜田　千栄　　早川　幸子　　新村　知子
藤田佐和子　　鎌田　倫子　　島　　弘子
札野　寛子　　北村　真美

金沢大学の留学生日本語教育担当の講師８名から成る日本語教育研究会では，本年度の共同研究テーマとして留学生として必要とされる日本語能力のニーズ分析を取り上げ，日本語学習を中心に金沢大学外国人留学生のおかれた現状の調査をおこなうことにした。このテーマを選んだ背景には，ますます増加する留学生受け入れに伴い，金沢大学の留学生の実像や留学生活の実態を捉え，授業シラバス作成や教材選択にあたって学生のニーズを的確に認識しておきたいという願いがある。

一言で「日本語教育」といっても，学生の日本語能力や日本語を学習する目的によって教材も異なり授業活動も多様化する。具体的にシラバスを決定するためには，まずすでにどの程度まで日本語を習得しているかを確認した上で，何を目標として授業を進めるべきか，たとえば留学生として必要とされる日本語はどのような場面でのどのような技能なのか，会話の技能なのか読み書きの技能なのかといった日本語学習のニーズを特定することが重要な手続きである。これらはひとりひとりの学生のおかれた立場によって異なることが予想されるが，今後ますます増加する留学生によりよく対応するために，まず金沢大学における留学生のキャンパス内外での言語活動の様子を探り，おおまかな全体のニーズをつかんでみることでもかなりの知見が得られるはずである。さらに留学生がまわりの日本人とどのような交流を持っているかを探ることも明確な留学生像を描くために参考になる。

また，その留学生像を留学生自身からだけの視点ではなく，留学生を取り巻く指導教官や日本人学生の立場から捉えることも重要である。すなわち，実際にどのように指導教官や日本人学生と交流をもっているのか，そして日本語の学習を進める上でこれらの人々からどのような形で支援を受けられるかを知ることも日本語教師としては興味のあるところである。

このような趣旨のもとに当研究会では，留学生，指導教官，日本人学生をそれぞれ対象に３種類のアンケート調査用紙を作成した。各調査においては以下のような点を分析のポイントとした。

〈留学生〉

(1)　どのような学生が留学生グループを構成しているのか。
　　――出身国の分布，身分（学部／大学院），専攻分野，奨学金の有無など

(2)　金沢大学入学以前及び入学後にどのように日本語を学習しているか。

(3)　留学生活のどのような活動，場面において日本語が必要だと認識しているか。

(4)　留学生は実際にどのような状況で日本語を使っているのか。そこにはどんな問題があるのか。

(5) 日本語の授業や大学に対してどのような要望があるのか。

〈指導教官〉

(1) 留学生を教えるときには，どのような指導形態が取られているか。また，授業以外には，どのような場所で，どのくらいの時間接しているか。

(2) 留学生とは何語で話し，何語で文献を使用しているか。

(3) 留学生の日本語学習には，どのような協力をしているか。

(4) 授業だけを担当している留学生に対して，どのような指導形態を取っているか，また授業以外の活動や日本語学習に関しての協力などで，指導教官をしている留学生への対応とどのように違っているか。

(5) 留学生にどのような日本語能力を望んでいるか。

(6) 金沢大学で行われている日本語教育にどのような要望があるか。

〈日本人学生〉

(1) 日本人学生は留学生とどんな場面で，どんな言語で，どのくらいの時間接触しているのか。

(2) それは，文系，理系でどのような差異があるか。

(3) 日本人学生が留学生に対し，生活面，日本語学習面でどのような協力をしているのか。それはチューターと一般学生とで差異があるのか。

調査は，留学生用は平成3年10月から12月にかけて，また指導教官用，日本人学生用については翌4年1月に，学内郵送を利用して実施した。調査用紙の印刷，配布及び回収については学生部の寺井嘉治氏と岡田ほなみ氏に多大な御尽力をいただいた。この場を借りて，お二人及び回答をお寄せいただいた留学生，指導教官，日本人学生の皆さんに感謝の意を表したい。

（文責　札野）

# 金沢大学外国人留学生の日本語学習に関する調査報告 (1)留学生

札野寛子　早川幸子
桜田千栄　北村真美

Ⅰ．はじめに（担当：札野）
　1．調査の目的
　2．調査の実施
Ⅱ．回答者プロフィール（早川・桜田）
　1．身分
　2．出身国
　3．学費の負担元による分類
　4．留学理由
Ⅲ．日本語学習（早川）
　1．金大入学以前の日本語学習歴
　2．入学後の日本語学習方法
　3．学習に利用できる機材
Ⅳ．日本語のニーズ（札野）
　1．大学で
　2．アパート，アルバイトで
　3．街，病院で
Ⅴ．日本語を使う状況（桜田，北村）
　1．話す相手
　2．話題
　3．日本人と話すときに困ること
　4．もっと上手になりたいこと
Ⅵ．日本語の授業や大学への希望，要望（桜田）
　1．日本語の授業に対しての希望，要望
　2．金沢大学に対しての希望，要望
Ⅶ．まとめ（札野）
Ⅷ．おわりに（札野）

## Ⅰ　はじめに

### 1．調査の目的

今回の調査では，日本語学習の観点から金沢大学で学ぶ外国人留学生の実像や生活の実態を探り，留学生が必要とする日本語能力のニーズを分析することを目的とした。調査にあたっては，次の6点を中心に質問用紙を作成した。

(1)　どのような学生が留学生グループを構成しているのか

———出身国の分布，身分（学部／大学院），専攻分野，奨学金の有無など

(2) 金沢大学入学以前及び入学後にどのように日本語を学習しているか。
(3) 留学生活のどのような活動，場面において日本語が必要だと認識しているか。
(4) 留学生は実際にどのような状況で日本語を使っているのか。そこにはどんな問題があるのか。
(5) 日本語の授業や大学に対してどのような要望があるのか。

### 2．調査の実施

調査方法は筆記アンケート形式を採用し，平成3年度後期金沢大学に在籍する全留学生（143人）を対象に行った。調査用紙作成にあたっては，まず日本語版を作成し日本語能力の不十分な学生のために英語版と中国語版を用意した。

143人のうち10月中旬に行われた平成3年度後期日本語（補講）授業のためのプレースメントテストを受験した56人には，テスト終了後各自に日本語版，英語版，中国語版の中から最適の調査用紙を選択してもらい，その場でアンケートに回答してもらった。残りの留学生に対しては11月中旬より3週間のあいだに，学生部で各学生の日本語能力を考慮して必要なら英語版か中国語版を選び，留学生各個人あてで各学部学生係を経由してアンケート用紙を配布し，同じルートで113人より回収した。回収率は79.0%であった。

## Ⅱ　回答者のプロフィール

アンケートの回答者113人は金沢大学の外国人留学生総数143人中79.0%にあたる。以下本分析では113人の回答者を「留学生」と呼ぶことにする。

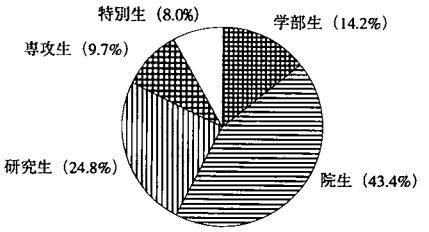
表Ⅱ．0．1　留学生総数と回答者数

| | 総数 | 学部生 | 院生 | 研究生 | 専攻生 | 特別生 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 留学生 | 143 | 21 | 62 | 40 | 20 | 9 |
| 回答者 | 113 | 16 | 49 | 39 | 11 | 9 |
| 回答率 | 79.0% | 76.2% | 79.0% | 97.5% | 50.0% | 100.0% |

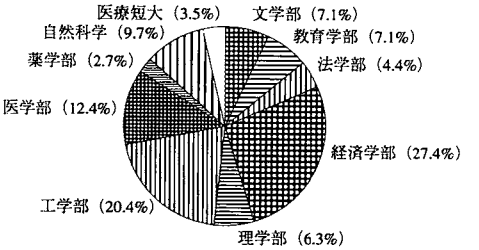
### 1．身分および所属学部

表Ⅱ．0．1に見られるように，留学生を身分別に学部生，大学院生，研究生，専攻生，特別生の5グループに分類した。学部生，大学院生は，大学の正規生で，研究生は大学院所属の非正規生，専攻生は学部所属の非正規生である。特別生はアイルランド国立ダブリンシティ大学及び旧ソ連の極東国立総合大学から受け入れた短期留学生である。留学生の身分別構成は図Ⅱ．1．1のとおりで，大学院生が49人（43.4%）と最も多く，研究生，学部生と続く。

図Ⅱ.1.1　身分別構成




図Ⅱ.1.2　所属学部別構成




留学生の所属学部別構成は図Ⅱ.1.2のとおりで，経済学部が最も多いが，この数値には短期留学の特別生9人が含まれている。次いで工学部の学生が多い。それぞれの身分における文系と理系の比率は表Ⅱ.1.1のとおりで，大学院生と研究生では理系の比率が高く，特別生と専攻生では文系の比率が高い。

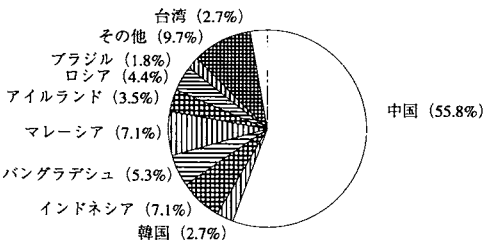
表Ⅱ.1.1　文系・理系学生の比率

| | 学部生 | | 大学院生 | | 研究生 | | 専攻生 | | 特別生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 文系 | 9 | 56.3% | 14 | 28.6% | 11 | 39.3% | 9 | 81.8% | 9 | 100.0% |
| 理系 | 7 | 43.8% | 35 | 71.4% | 17 | 60.7% | 2 | 18.2% | 0 | 0.0% |
| 計 | 16 | | 49 | | 28 | | 11 | | 9 | |

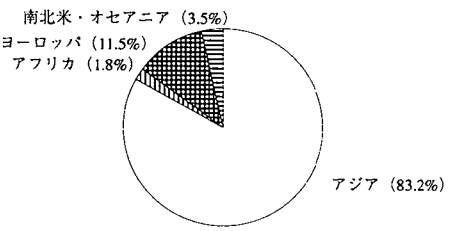
## 2．出身国

留学生の出身国をみると，図Ⅱ.2.1，図Ⅱ.2.2からわかるようにアジア出身者が94人で，83.2%を占め，中でも中国出身者は63人（55.8%）にのぼる。

図Ⅱ.2.1　出身国別構成




図Ⅱ.2.2　出身地域別構成




## 3．学費の負担元による分類

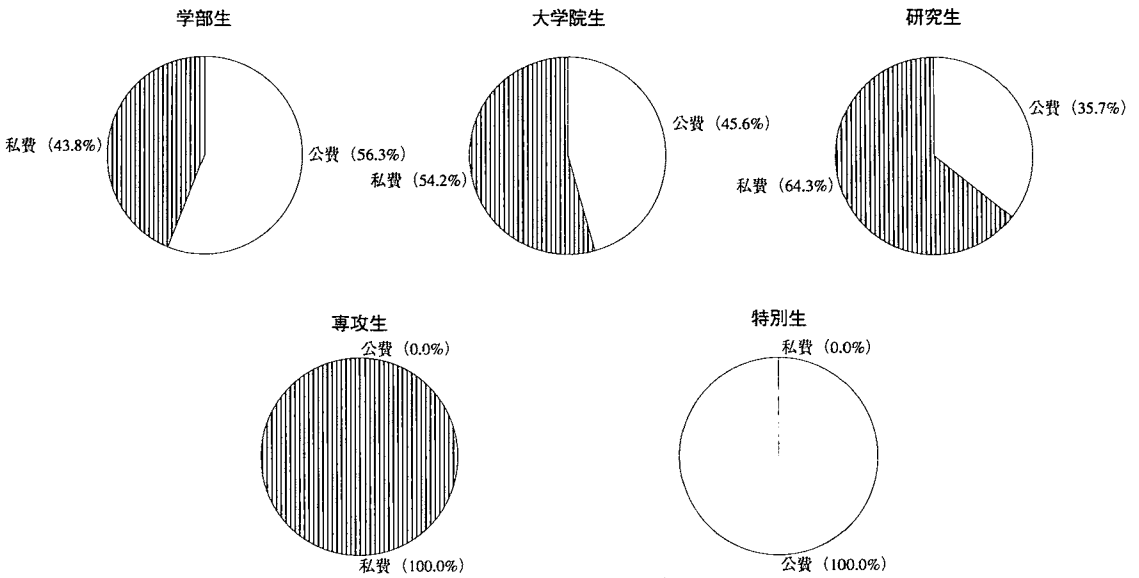
留学生を学費の負担元により公費留学生と私費留学生に分ける。公費留学生は国費留学生（日本政府）と外国政府派遣留学生の両方を指す。

表Ⅱ．3．1　公費・私費留学生数

| | 人　数 | % |
|---|---|---|
| 公　費 | 50 | 44.6% |
| 私　費 | 62 | 55.4% |
| 計 | 112 | |

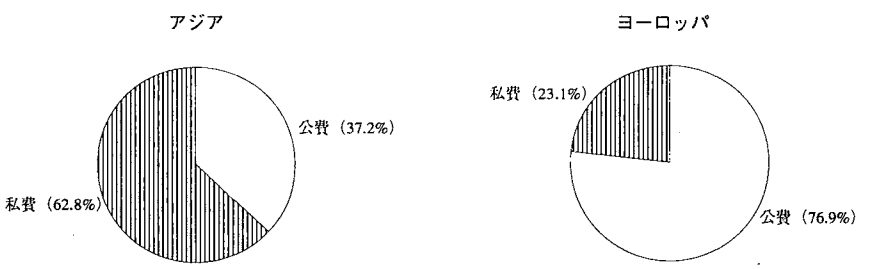
表Ⅱ．3．1が示すように，全体では私費留学生が公費留学生をわずかに上回る。これを身分別にみると，図Ⅱ．3．1のとおり，特別生は全員公費留学生で，次いで公費留学生が多いのは研究生，大学院生である。専攻生は全員私費留学生である。

図 II．3．1　身分別公費留学生

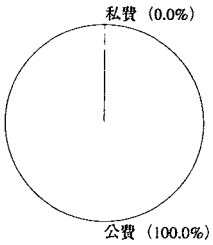



これを出身地域別にみると図Ⅱ．3．2の示すように，南北アメリカ・オセアニア，アフリカ出身者は全員公費留学生，ヨーロッパ出身者も公費留学生が多いが，アジア出身者は私費留学生が多い。

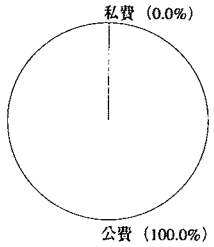
図 II．3．2　出身地域別公費・私費留学生



南北米・オセアニア




アフリカ




## 4．留学理由

どうして日本に留学することにしましたか。次の中であてはまるものにいくつでも○をつけてください。

A　学位を取るため

B　いま勉強している分野では日本の研究，技術がすぐれているから

C　日本語がわかると就職に有利だから

D　日本の文化，社会に関心があったから

E　どの国でもかまわないが，とにかく留学したかったから

F　日本で勉強するための奨学金をもらえたから

表Ⅱ．4．1　留学理由

| 理　由 | A | B | C | D | E | F |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 人　数 | 78 | 68 | 23 | 61 | 12 | 27 |

留学生が日本に留学した理由をみると，表Ⅱ．4．1のように，「学位の取得」を留学理由としてあげた者が最も多く，次いで「日本の研究，技術がすぐれている」「日本の文化，社会への関心」と続く。「日本で勉強するための奨学金をもらえたから」と答えた者が27人いるものの，「どの国でもかまわない」と答えた者は12人と少なく，日本を留学先として積極的に選んだ学生が多いことを示している。

留学理由を身分別にみると，表Ⅱ．4．2のとおり，「学位を取るため」と答えた者は大学院生，学部生で多く，「研究，技術がすぐれているため」と答えた者は学部生，大学院生，研究生の順である。特別生は全員が「日本語がわかると就職に有利」をあげているが，これは日本語・日本経済を専攻し，将来の仕事に日本語能力を生かしたいという特別生の志望を反映しているものと思われる。日本の文化・社会に関心が高いのも特別生である。

表Ⅱ．4．2　身分別理由

| | 学部生（16） | | 大学院生（49） | | 研究生（28） | | 専攻生（11） | | 特別生（9） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 理　由 | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| A | 12 | 75.0% | 38 | 77.6% | 16 | 57.1% | 5 | 45.5 % | 5 | 55.6% |
| B | 11 | 68.8% | 31 | 63.2% | 19 | 67.9% | 5 | 45.05% | 2 | 22.2% |
| C | 6 | 37.5% | 3 | 6.1% | 4 | 14.3% | 1 | 9.1 % | 9 | 100.0% |
| D | 6 | 37.5% | 26 | 53.0% | 15 | 53.6% | 1 | 9.1 % | 8 | 89.9% |
| E | 2 | 12.5% | 4 | 8.2% | 2 | 7.1% | 1 | 9.1 % | 3 | 33.3% |
| F | 6 | 37.5% | 12 | 24.5% | 7 | 25.0% | 0 | 0.0 % | 2 | 22.2% |

（　）内の数字は各身分の留学生数

留学理由を文系，理系別にみると，理系の学生に「研究，技術の優秀性」をあげる者が45人（73.8%）あり，文系の学生の35人（67.3%）が「文化，社会への関心」を示している。「学位の取得」は文系36人（69.2%），理系42人（68.8%）で，ともに高い数値を示している。公費留学生，私費留学生別に留学理由をみると，「日本で勉強するための奨学金をもらえたから」としている27人のうち23人が公費留学生で私費留学生の４人との差が大きいが，その他の項目では公費留学生と私費留学生の差異はほとんどみとめられない。

出身地域別では，アジア，アフリカ出身者に「学位取得」と「研究，技術の優秀さ」をあげる数値が高く，ヨーロッパ，南北アメリカ・オセアニア出身者に「文化，社会に関心」を示す者が多い。

| |
|---|
| どうして金沢大学で勉強することに決めましたか。金沢大学を選んだ理由を具体的に書いてください。 |

項目別に整理すると，以下の通りである。

(1)　専門に関連したもの　38（内私費18／　学－１／院－23／研－12／専－３）

国立大学　8（内私費３／　学－１／院－４／専－１／研－２／マレーシア１，バングラ１，中国６）

並記して，レベルが高い，有名など

自国の指導教官の推薦又は紹介　7（内私費４／　院－５／研－２）

自分の専門分野がある。又は有名。　22（内私費10／　院－14／研－５／専－１）

教官に個人的に指導をしてもらっていたなど

先進的技術を学ぶため　1（私費／専－１）

(2)　大学の対応　6（内私費５／　院－４／研－１／専－１）

金沢大学が受け入れを許可してくれた　3（内私費２／　院－１／研－１／専－１）

大学が親切　2（共に私費／院－２）

大学当局の留学生の生活面への関心が高い　1（私費／院－１）

(3)　日本語に関連して　2（内私費２／　院－１／専－１）

日本語の授業の充実　1（私費／院－1）
日本語を学ぶため　1（私費／専－1）

(4)　生活上の理由　34（内私費22／　学－4／院－18／研－5／専－3／特－4）
金沢がよい町である　23（内私費11／　学－3／院－14／研－2／特－4）
伝統がある。環境がよい。景色がよい。物価が安い。日本らしい町。東京ではない。
知人の紹介　4（私費4／　学－1／院－2／専－1）
親族又は友人が先にきていた　6（私費6／　院－2／研－3／専－1　全員中国）
国立大学で月謝が安い　1（私費／専－1）

(5)　理由のはっきりしないもの　8（内私費3／　学－2／院－2／研－1／専－1／特－2）
富山にいたが早く大学院に入ったほうがよいと思って　1（院－1）
大学のような公的機関で勉強するほうがよいと思って　1（私費／専－1）
小松市立病院の研修が終わり，大学で勉強したかったから　1（私費／研－1）
特に理由なし　4（内私費1／　学－2／特－1／院－1）
不明　1（特－1）

(6)　決定が自分の意志によらないもの　23（内私費0／　学－6／院－7／研－8／特－2）
文部省が決定　11（学－4／院－3／研－4）
自国の政府が決定　3（学－2／院－1）
交換留学で　1（研－1）
県費留学生（親類が金沢にいる）　2（研－2）
奨学金を得た　2（院－2）
他の選択がなかった　4（院－1／特－2／研－1）

(7)　回答なし　1（内私費0／院－1）
無回答　1（院－1）

金沢を選んだ理由としては「専門に関係がある」(38)「生活上の理由」(34) の順にこの二つが抜きん出て高い数を示しているが，次いで「決定が自分の意志によらないもの」(23) である。又，私費と公費に分けてみると，私費の学生に「大学の対応」(5／6)「生活上の理由」(22／34) で，金沢を選んだものが多い。特に「知人の紹介」「親族又は友人が先に来ていた」では，全員が私費である。それに対して「決定が自分の意志によらないもの」は全員が公費である。

身分別でみると「専門に関連して」は院生，研究生が多く，学部生は1人にすぎない。

それに対し「自分の意志によらないもの」では，学部生が6人と高い率を示している。

## Ⅲ　日本語学習

### 1　金沢大学入学以前の日本語学習歴

| |
|---|
| 金沢大学に入学する前に，どこで何年ぐらい日本語を勉強しましたか。 |

［A］学校で勉強した経験
［B］TV／ラジオ・通信教育，家庭教師，独学，その他の方法で勉強した経験

上の質問への回答結果を，(a)日本国内の学校，(b)海外の学校，(c)日本国内の学校以外，(d)海外の学校以外に分け，それぞれ学習期間を3か月以下，6か月以下，1年以下，2年以下，それ以上の5段階に分けて分析した結果が表Ⅲ．1．1である。

表Ⅲ．1．1　入学前の学習歴

| | 国内学校 | | 海外学校 | | 国内学校以外 | | 海外学校以外 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学習期間 | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 3か月以下 | 1 | 0.9% | 3 | 2.7% | 1 | 0.9% | 4 | 3.6% |
| 6か月以下 | 10 | 8.9% | 7 | 6.2% | 0 | 0.0% | 3 | 2.7% |
| 1年以下 | 15 | 13.3% | 15 | 13.3% | 0 | 0.0% | 5 | 4.4% |
| 2年以下 | 3 | 2.7% | 12 | 10.6% | 1 | 0.9% | 2 | 1.8% |
| 2年以上 | 1 | 0.9% | 20 | 17.7% | 0 | 0.0% | 1 | 0.9% |
| 未　習 | 24 | 21.2% | 24 | 21.2% | 4 | 21.2% | 24 | 21.2% |

表Ⅲ．1．1で，入学時に日本語の学習歴がまったくなかった者が24人いることがわかる。既習者全体についてみると，日本国内の学校で，6か月～1年学習した者15人（13.3%），3か月～6か月学習した者10人（8.9%）と3か月から1年の間に集中している。海外の学校では，2年以上が20人（17.7%），6か月～1年が15人（13.2%），1年～2年が12人（10.6%）と分散している。国内では学校以外で勉強した者はほとんどいない。海外の学校以外は6か月～1年の5人を最高に，全期間に分散している。

身分別に学習歴の特徴をみると，

・学部生では未習者はゼロで，国内の学校で6か月～1年学習した者が16人中7人，海外の学校での学習歴は3か月～2年以上の各期間にわたり1～3人と分散している。
・大学院生は国内の学校で6か月～1年が49人中6人，海外の学校では，6か月～1年が10人，2年以上の者が8人などかなりの人数がいるものの，未習者も9人いる。
・研究生は国内で3か月以下の者，海外で2年以上の者がともに28人中6人いるが，9人の未習者がいる。
・専攻生は未習者が11人中5人と割合が高く，既習者も学習歴の短い者が多い。
・特別生は母国の大学で日本語を専攻する学生であるため，海外の大学での学習歴が1年～2年，2年以上がともに9人中4人である。

表Ⅲ．1．1で注目すべきことは入学前の日本語学習歴がゼロ乃至6か月以下の留学生が35人にのぼることで，初級クラスの日本語の授業を必要とする者が30%以上いることを示している。

## 2　入学後の勉強方法

金沢での日本語の勉強の方法につて，1～4であてはまるものに○をつけてください。

1　はい（1991年現在）

2　いいえ

3　以前そうしていたが今はしていない

4　今はしていないが近い将来はじめる予定

〈質問項目〉

A　学生部の補講授業を取る

B　教養部の「日本語」の授業を取る

C　自分ひとりで勉強する

D　日本人に家庭教師をしてもらう

E　県社会教育センターで習う

F　語学学校に通う

G　通信講座で勉強する

上の質問では，自分の履修している授業が「学生部の補講」「教養部の授業」のどちらに該当するのか理解していない学生もあり，また，Cの「自分ひとりで勉強する」は「大学の授業を取らないで」というアンケート作成者の意図が伝わらず，ABCについては信頼できる回答結果が得られなかったため，表Ⅲ．2．1のA，Bは授業登録の記録などを参考に修正を加え，Cについては省略した。

表Ⅲ．2．1　入学後の勉強方法

| 項目 | A* | | B* | | C | D | | E | | F | | G | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数　% | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 無回答 | 20 | 17.7% | 41 | 36.3% | | 53 | 46.9% | 47 | 41.6% | 52 | 46.0% | 54 | 47.8% |
| 1 | 62 | 54.9% | 16 | 14.1% | 省 | 12 | 10.6% | 4 | 3.5% | 3 | 2.6% | 2 | 1.8% |
| 2 | 20 | 17.7% | 53 | 46.9% | | 42 | 37.2% | 51 | 45.1% | 53 | 46.9% | 51 | 45.1% |
| 3 | 8 | 7.1% | 1 | 0.9% | | 4 | 3.5% | 6 | 5.3% | 5 | 4.4% | 3 | 2.7% |
| 4 | 3 | 2.7% | 2 | 1.8% | 略 | 2 | 1.8% | 5 | 4.4% | 0 | 0.0% | 3 | 2.7% |
| 計 | 113 | | 113 | | | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

＊　授業登録により修正を加えた数値

「学生部の補講授業を取っている」のは62人（54.9%）で，内訳は大学院生20人，研究生24人，専攻生9人，特別生9人である。「教養部の日本語の授業」は，学部生の留学生に必修の授業で，表の16人は全員学部生である。「家庭教師をしてもらう」と答えたのは12人（10.6%），「県社会教育センターで習っている」のは4人，「語学学校で以前勉強した」は5人で，「現在勉強している」は1人，「通信講座」も「以前受けた」3人，「現在受けている」2人と低い数値で，学外で勉強している者はわずかである。

この結果から，「教養部の日本語」が必修となっている学部生を除く97人中2／3にのぼる留学生が「日本語の補講」を受講していることがわかった。大学以外で日本語を学習している学生が少ないことを考慮すると，「学生部の日本語の補講」は学部生以外の留学生にとって唯一の日本語学

習の場であり，それだけに重要性も高いと言える。

### 3　学習に利用できる機材

> 授業以外の時間に，自宅や大学で日本語の勉強のために使える機材に○をつけてください。
> 機材
> 　ラジオ，テレビ，カセットテープレコーダー，ビデオテープレコーダー，パーソナルコンピューター，ワードプロセッサー
> 使える場所
> 　自宅で，大学で，その他の場所で

回答結果は表Ⅲ．3．1のとおりである。

表Ⅲ．3．1　使用できる学習機材

| | ラジオ | | | テレビ | | | カセット | | | ビデオ | | | パソコン | | | ワープロ | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 場所 | 自宅 | 大学 | 他 | 自宅 | 大学 | 他 | 自宅 | 大学 | 他 | 自宅 | 大学 | 他 | 自宅 | 大学 | 他 | 自宅 | 大学 | 他 |
| 小計 | 50 | 16 | 2 | 60 | 16 | 1 | 59 | 18 | 2 | 18 | 12 | 1 | 11 | 25 | 1 | 11 | 18 | 2 |
| 計 | 68 | | | 77 | | | 79 | | | 31 | | | 37 | | | 31 | | |

この結果をみると，カセットテープレコーダー，テレビ，ラジオは多くの学生が使用できる機材で，しかも自宅で使用している学生が多い（カセットの中には大学からの貸与を受けているものもある）ので，テープレコーダー，ラジオ，テレビを利用しての自宅学習を課することも可能である。パソコン，ビデオ，ワープロが使用できる学生はその半分以下である。ビデオは自宅で使用している場合が多いが，パソコン，ワープロは大学のものを使用している場合が多い。

## Ⅳ　日本語のニーズ

> 次のような場面で「日本語を使うこと」は，あなたの生活にどの程度必要ですか。下記の指示にしたがって，それぞれの場面で「1」～「5」の番号をひとつ選んでください。
> 　1　自分の生活には関係ない。
> 　2　日本語以外の言葉を使うことが多い。
> 　3　たまに必要である。
> 　4　時々必要である。
> 　5　ほとんど毎日の生活に必要である。

本節では，留学生にとっての日本語の「ニーズ」，すなわち彼らがどのような場面でどの程度の日本語能力を必要としているかの質問への回答結果を，回答者の身分（学部生，大学院生など）によ

る５つのグループ間で異なる特徴がみられるかに留意しながら，分析及び考察する。ここでは具体的な場面での日本語の使用が，どの程度の頻度で必要であると認識しているかを「必要度」と規定して，この必要度が高い場面での日本語能力が留学生にとっての「ニーズ」であるとみなすことにした。場面は大きく分けて「大学」「アパート，アルバイト」「街，病院」での３つで，計34場面をとりあげた。

## 1　大学で

まず以下のような大学においての学業活動に関する10場面と学業以外に大学生活で予想される４場面について留学生の日本語の必要度認識を探った。（113人全体の回答の分布を示す「表Ⅳ．１．１　大学」参照）

表Ⅳ．１．１　大　　学

〈学業活動〉

| | 講義を聞く | | ノートを取る | | 先生に質問 | | 資料を読む | | 試験の答案を書く | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0 無回答 | 18 | 15.9 | 21 | 18.6 | 16 | 14.2 | 15 | 13.3 | 32 | 28.3 |
| 1 不要 | 2 | 1.8 | 5 | 4.4 | 0 | 0.0 | 1 | 0.9 | 9 | 8.0 |
| 2 他の言語で | 9 | 8.0 | 14 | 12.4 | 9 | 8.0 | 7 | 6.2 | 8 | 7.1 |
| 3 たまに | 10 | 8.8 | 14 | 12.4 | 19 | 16.8 | 13 | 11.5 | 20 | 17.7 |
| 4 時々 | 27 | 23.9 | 23 | 20.4 | 32 | 28.3 | 27 | 23.9 | 24 | 21.2 |
| 5 毎日 | 47 | 41.6 | 36 | 31.9 | 37 | 32.7 | 50 | 44.2 | 20 | 17.7 |
| 計 | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

| | レポートを書く | | 実験，演習に参加 | | 議論 | | 論文作成 | | 口頭発表 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0 無回答 | 26 | 23.0 | 27 | 23.9 | 25 | 22.1 | 36 | 31.9 | 36 | 31.9 |
| 1 不要 | 11 | 9.7 | 17 | 15.0 | 3 | 2.7 | 14 | 12.4 | 14 | 12.4 |
| 2 他の言語で | 11 | 9.7 | 3 | 2.7 | 5 | 4.4 | 15 | 13.3 | 9 | 8.0 |
| 3 たまに | 18 | 15.9 | 21 | 18.6 | 22 | 19.5 | 12 | 10.6 | 24 | 21.2 |
| 4 時々 | 27 | 23.9 | 23 | 20.4 | 29 | 25.7 | 20 | 17.7 | 14 | 12.4 |
| 5 毎日 | 20 | 17.7 | 22 | 19.5 | 29 | 25.7 | 16 | 14.2 | 16 | 14.2 |
| 計 | １１３ | | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

〈課外活動〉

| | 係の人に相談 | | 買物 | | クラブ活動に参加 | | 友人とおしゃべり | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0 無回答 | 20 | 17.7 | 24 | 21.2 | 33 | 29.2 | 16 | 14.2 |
| 1 不要 | 7 | 6.2 | 6 | 5.3 | 23 | 20.4 | 2 | 1.8 |
| 2 他の言語で | 2 | 1.8 | 2 | 1.8 | 4 | 3.5 | 2 | 1.8 |
| 3 たまに | 29 | 25.7 | 22 | 195 | 21 | 18.6 | 11 | 9.7 |
| 4 時々 | 28 | 24.8 | 24 | 21.2 | 16 | 14.2 | 30 | 26.5 |
| 5 毎日 | 27 | 23.9 | 35 | 31.0 | 16 | 14.2 | 52 | 46.0 |
| 計 | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

〈学業活動に関して〉

A　先生の講義を聞く
B　ノートをとる
C　先生に質問する
D　教科書や参考図書，研究資料を読む
E　試験の答案を書く
F　レポートを書く
G　実験や演習に参加する
H　専門について議論する
I　学会論文や修士，博士論文を作成する
J　学会や研究会で口頭発表する

〈課外活動に関して〉

K　図書館や事務室で係の人に相談する
L　生協や売店で買物をする
M　クラブ活動に参加する
N　日本人の友達とおしゃべりをする

学生の基本活動である講義の聴講に関する「先生の講義を聞く」「ノートをとる」では，回答者全体で「5　ほとんど毎日の生活に必要である」（「講義」5グループ全体41.6%，「ノート」31.9%）と「4　時々必要である」（「講義」23.9%，「ノート」20.4%）をあわせると予想されるようにそれぞれ6割前後の留学生が「必要である」と考えている。これを身分別に見てみると，学部生はそのほとんどが「毎日」必要と回答しているのに対して，大学院生，研究生，専攻生は「毎日」と「時々」に分散する。この違いは身分により受講科目数や時間数に違いがあるからであろう。

「先生に質問する」では5グループ全体で「毎日」（32.7%）と「時々」（28.3%）に回答が集まったのに，学部生では「時々」（37.5%）「たまに」（37.5%）に片寄った。この結果からゼミ形式の授業が多い大学院生や研究生に比べて，学部生が受講する授業は，学生数が多い講義形式のもの中心で，授業外で教員に質問することも少ない受身的な受講である様子がうかがえる。

「教科書や参考図書，研究資料を読む」では，どのグループも一様に「毎日」（全体44.3%）「時々」（同23.9%）に回答が集中した。

試験に関する2場面の「試験の答案を書く」（全体―「毎日」17.7%，「時々」21.2%，学部生―25.0%，43.8%）と「レポートを書く」（全体―17.7%，23.9%，学部生―37.5%，18.8%）は，「講義を聞く」「ノートをとる」と同じような傾向で学部生の方に必要度が高かった。

「実験や演習に参加する」はどのグループでも「毎日」「時々」「たまに」に分散する傾向が見られた（全体―「毎日」19.5%，「時々」20.4%，「たまに」18.6%）。これは専門分野により，実験や演習を重視する分野と講義中心のカリキュラムに分かれていることによるものと予想され，今後の課題として分野別に実際にどのような学習活動を行っているのかを調べてみることもニーズの特定に参考になると思われる。一方，「専門について議論する」はどのグループも半分以上の学生が「毎日」あるいは「時々」必要であると答えている。（全体―「毎日」25.7%，「時々」25.7%）

「学会論文や修士，博士論文を作成する」「学会や研究会で口頭発表する」で研究生や専攻生，特別生などに無回答が多かったことは，彼らの立場上これらの活動が無関係であることが推測されやむを得ないと思われたが，大学院生でも判断の基準が頻度を中心にした選択肢であったためか，あまり高い必要度は示されなかった。また大学院生では論文作成において「2日本語以外の言葉を使うことが多い」と回答した学生も49人中8人（16.3%）いた。これは特に理工系においては公に発表する場合の共通言語が英語であることが多いという事実と関連があるのだろう。この点について

特に大学院レベルにおいてもう少し追跡調査が要ると思われる。

課外の活動の一場面の「図書館や事務室で係の人に相談する」は5グループ全体で「毎日」「時々」「たまに」に回答がほぼ均等に分散し，これらへの回答数を合わせると75％程度に上る。（「毎日」23.9％，「時々」24.8％，「たまに」25.7％）。「生協や売店で買物をする」でも，同じく7割強が先の3種の回答のいずれかを選び，中でも「毎日」にやや高い率の回答があり（同31.0％，21.2％，19.5％），この2場面はどちらも高い必要度が認められたと考えられる。

「クラブ活動に参加する」は全体では「必要でない」と回答した留学生が20.4％で，無回答数も29.2％にのぼる。必要だと考える回答者全体での分布は「たまに」（18.6％）「時々」（14.2％）「毎日」（14.2％）である。ただし学部生については，「必要でない」（25.0％），「たまに」（25.0）「毎日」（31.3％），無回答（12.5％），のように全体とは異なった分散を見せた。この結果では，日本人学生には学生生活の中でかなり大きな位置を占めると予想されるクラブ，サークル活動が，留学生では一部の学部生のみが参加する程度で，ほとんど無関係であることが描きだされている。

「日本人の友達とおしゃべりをする」はどのグループも「毎日」（全体46.0％）「時々」（26.6％）に回答が集まり，留学生が友達と頻繁に日常の会話を交わしていることがわかる。

以上の結果からどのグループにおいても高い必要度が認められたのが，「質問する」「資料を読む」「議論する」「友達とおしゃべりをする」で，学部生において特に高く必要とされているのが「講義を聞く」「ノートをとる」「試験の答案を書く」「レポートを書く」であった。この項全体では，論文作成や口頭発表といった高度な研究活動やクラブ，サークル活動のように一部の留学生しか参加しない活動を除いて，学業，課外活動の両面において一様に日本語が必要度が高いことが明らかになった。

## 2　アパート，アルバイトで

当項目及び次項目ではキャンパス外での留学生の生活に目を向け，ここでは次のような各自の住居での7場面とアルバイト関係4場面を分析した。「表Ⅳ．2．1　アパート，アルバイト」は，113人全体の回答の分布を示している。

アパート，下宿，寮で

〈近所の人々とのつきあい〉

A　大家さんや管理人さんと話す
B　そこに住んでいる人と話す

〈個人生活におけるメディアの利用〉

C　新聞や雑誌を読む
D　ラジオやテレビのニュース番組を視聴する
E　テレビのドラマやクイズ番組を見る
F　手紙を書く
G　電話で話をする

アルバイトで

A　一緒に働いている人と話をする
B　お客様の世話をする
C　日本語の資料を読む
D　日本語で書類を書く

表Ⅳ.2.1　アパート，アルバイト

〈アパート，下宿，寮で〉

| | 大家，管理人と話す | | 住人と話す | |
|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % |
| 0 無回答 | 24 | 21.2 | 21 | 18.6 |
| 1 不要 | 19 | 16.8 | 12 | 10.6 |
| 2 他の言語で | 2 | 1.8 | 5 | 4.4 |
| 3 たまに | 35 | 31.0 | 24 | 21.2 |
| 4 時々 | 14 | 12.4 | 28 | 24.8 |
| 5 毎日 | 19 | 16.8 | 23 | 20.4 |
| 計 | 113 | | 113 | |

〈個人生活におけるメディアの利用〉

| | 新聞，雑誌を読む | | ニュース番組を視聴 | | クイズ，ドラマ番組 | | 手紙を書く | | 電話で話す | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0 無回答 | 17 | 15.0 | 12 | 10.6 | 17 | 15.0 | 18 | 15.9 | 13 | 11.5 |
| 1 不要 | 3 | 2.7 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 6 | 5.3 | 4 | 3.5 |
| 2 他の言語で | 8 | 7.1 | 3 | 2.7 | 3 | 2.7 | 20 | 17.7 | 2 | 1.8 |
| 3 たまに | 15 | 13.3 | 12 | 10.6 | 19 | 16.8 | 30 | 26.5 | 22 | 19.5 |
| 4 時々 | 27 | 23.9 | 24 | 21.2 | 25 | 22.1 | 17 | 15.0 | 40 | 35.4 |
| 5 毎日 | 43 | 38.1 | 62 | 54.9 | 49 | 43.4 | 22 | 19.5 | 32 | 28.3 |
| 計 | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

〈アルバイトで〉

| | 一緒に働く人と話す | | 客の世話をする | | 資料を読む | | 書類を書く | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0 無回答 | 43 | 38.1 | 50 | 44.2 | 49 | 43.4 | 50 | 44.2 |
| 1 不要 | 18 | 15.9 | 26 | 23.0 | 23 | 20.4 | 24 | 21.2 |
| 2 他の言語で | 2 | 1.8 | 1 | 0.9 | 2 | 1.8 | 2 | 1.8 |
| 3 たまに | 14 | 12.4 | 9 | 8.0 | 7 | 6.2 | 11 | 9.7 |
| 4 時々 | 17 | 15.0 | 13 | 11.5 | 14 | 12.4 | 15 | 13.3 |
| 5 毎日 | 19 | 16.8 | 14 | 12.4 | 18 | 15.9 | 11 | 9.7 |
| 計 | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

〈近所の人々とのつきあい〉の「大家さんや管理人さんと話す」場面は，全体では「たまに必要」(31.0%) が一番多く回答を集めた。一方「そこに住んでいる人と話す」ではどのグループも「たまに」「時々」「毎日」と「無回答」に2割前後ずつが分散した。この回答の散らばりは，住居のタイプが学生用の寮やアパートか一般社会人を中心としたアパートかといった住宅環境により，また留学生が単身か家族同伴かの条件の差によって留学生の周辺に住む人々との交流の様子が異なることによるのかもしれない。

この2問で共通していた点は「2日本語以外の言葉を使うことが多い」がどちらも113人中「大家／管理人」2人 (1.8%)，「住人」5人 (4.4%) だけで，住居でのつきあいにおいては日本語が優勢であることがわかる。また身分による回答の差異はみとめられなかった。

続いて留学生がアパート等で個人の生活を営む際に，様々なコミュニケーションのメディアを活用するときの日本語のニーズを探った。一般的には「手紙を書く」を除いてどのメディアの場合も

日本語の必要度は高いと認識されている。（5グループ全体の「毎日」と「時々」の合計「新聞」61.9%，「ニュース」76.1%，「ドラマ，クイズ」65.5%，「手紙」34.5%，「電話」63.7%）

グループ間での目立った違いとして，学部生と専攻生は他のグループよりも「ラジオやテレビのニュース番組を視聴する」（全体「毎日」54.9%，学部生81.3%，専攻生63.6%）と「テレビのドラマやクイズ番組を見る」（全体「毎日」43.4%，学部生75.0%，専攻生54.6%）では「毎日」への回答数が高く，この2グループは他のグループよりもテレビ等を視聴する時間の長いことが推測される。

アルバイトの場面における日本語の必要度に関してはどのグループも2割前後の留学生が「1　自分の生活には関係ない」を選択しており，これらの学生はアルバイト活動をしていないとみなされる。英語や中国語を教えるなど，「2　日本語以外の言葉を使うことが多い」と回答したものは全体で1，2人しかいなかった。またこの4場面については他の項目に比して無回答者が4割前後に上っていた。したがって各場面ごとに「たまに」「時々」「毎日」のいずれかを選択した学生数を合計すると「一緒に働いている人と話をする」が113人中50人（44.1%），「お客様の世話をする」36人（31.8%），「日本語の資料を読む」39人（34.5%），「日本語で書類を書く」37人（32.8%）で，約4割がアルバイトの場面で日本語を必要としていることがわかる。これらの4場面の中では若干「一緒に働いている人と話をする」の回答が多い。ただしどの場面でも頻度差やグループ別による回答における大きな差は見られず，アルバイトでの日本語の必要度の認識は個人により異なるものと考えられる。

この項で取り上げた場面全体では，個人の生活においては様々なメディアを利用するために日本語が必要だという認識が高いのに対して，留学生を取り巻く人々との関わり方はかなり個人差が大きく，それによって日本語の必要度もかなり異なっていることがわかる。

### 3　街，病院で

第三に留学生が街に出て遭遇するとおもわれる7場面と，特殊な言語表現を必要とする医療機関での2場面を取り上げた。（113人全体の回答分布は「表Ⅳ．3．1　街，病院」参照）

街で

A　バスやタクシーを利用する
B　道をたずねる
C　レストランや喫茶店で注文する
D　デパートやスーパーで店員と話をする
E　銀行や郵便局，市役所などで係りの人と話す
F　友達や知人と食事したり，酒を飲む
G　友達や知人とスポーツなどをする

病院，大学の診療所，薬局で

A　病気やけがの様子を説明する
B　医師の説明を聞く

表Ⅳ．3．1　街，病院

〈街で〉

| | バス／タクシー | | 道をたずねる | | レストラン／喫茶店 | | デパート／スーパー | | 銀行／郵便局／市役所 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0無回答 | 21 | 18.6 | 17 | 15.0 | 23 | 20.4 | 19 | 16.8 | 16 | 14.2 |
| 1不要 | 3 | 2.7 | 2 | 1.8 | 4 | 3.5 | 0 | 0.0 | 1 | 0.9 |
| 2他の言語で | 4 | 3.5 | 1 | 0.9 | 0 | 0.0 | 1 | 0.9 | 1 | 0.9 |
| 3たまに | 40 | 35.4 | 41 | 36.3 | 36 | 31.9 | 32 | 28.3 | 35 | 31.0 |
| 4時々 | 23 | 20.4 | 26 | 23.0 | 27 | 23.9 | 35 | 31.0 | 35 | 31.0 |
| 5毎日 | 22 | 19.5 | 26 | 23.0 | 23 | 20.4 | 26 | 23.0 | 25 | 22.1 |
| 計 | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

〈病院，大学の診療所，薬局で〉

| | 食事をする | | スポーツをする | | 病状を説明する | | 病状の説明を聞く | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 0無回答 | 23 | 20.4 | 24 | 21.2 | 28 | 24.8 | 30 | 26.5 |
| 1不要 | 4 | 3.5 | 8 | 7.1 | 11 | 9.7 | 10 | 8.8 |
| 2他の言語で | 2 | 1.8 | 3 | 2.7 | 2 | 1.8 | 40 | 35.4 |
| 3たまに | 34 | 30.1 | 30 | 26.5 | 41 | 36.3 | 36 | 31.9 |
| 4時々 | 32 | 28.3 | 31 | 27.4 | 15 | 13.3 | 18 | 15.9 |
| 5毎日 | 18 | 15.9 | 17 | 15.0 | 16 | 14.2 | 15 | 13.3 |
| 計 | 113 | | 113 | | 113 | | 113 | |

「バスやタクシーを利用する」「道をたずねる」は，短期在籍者である特別グループ9人は全員が「毎日」（「バス，タクシー」「道」両問共に55.6%）あるいは「時々」（同44.4%）必要であると高い必要性を実感していたのに対して，長期滞在型の他4グループは両問とも「たまに」への回答が4割（「バス，タクシー」「たまに」4グループ合計38.46%，「道」39.4%）でトップであった。この違いは明らかに土地勘の有無により道をたずねる頻度が変わることと，長期型は自転車やバイクあるいは徒歩で通学できる距離に住居を構えており，バス，タクシーの利用が少ないものと推測される。

「レストランや喫茶店で注文する」「デパートやスーパーで店員と話をする」「銀行や郵便局，市役所などで係りの人と話す」では，回答が「たまに」「時々」「毎日」に分散しており頻度は個人によるものと思われるが，これらへの回答をあわせると各問8割近くの留学生が必要であると考えている。グループによる特徴としては，大学院生においては外食や買物については，「たまに」（大学院生「レストラン，喫茶店」32.7%，「デパート，スーパー」36.7%）が多く，あまり頻繁ではないことがわかる。

「友達や知人と食事をしたり酒を飲む」「友達や知人とスポーツなどをする」は，どのグループも「たまに」と「時々」が互角でそれぞれ3割前後の回答があった。

つづいて特殊な表現を必要とする場面として，病院や診療所あるいは薬局で留学生の側が「病気やけがの様子を説明する」場面と「医師の説明を聞く」場面での日本語能力の必要度の認識について尋ねた。留学生が能動的に会話を進める前者と受動的に説明を聞く後者の質問の間には大きな差は見られず，どちらも全体では3割強の学生が「たまに」必要であると認識していた。（「説明す

る」全体「たまに」36.3%，「説明を聞く」同31.9%）

この「街，病院で」で取り上げた9場面に共通しているのは，これらの場面での日本語がおもに「たまに」必要であるという点であった。ただし短期滞在の留学生については「バス，タクシーを利用する」「道をたずねる」ための日本語は長期のグループよりも高い必要度が認められた。

以上のように計34場面について分析を行った結果を「大学」「アパート，アルバイト」「街，病院」各分野ごとへの回答の平均的分布を比較すると（「表Ⅳ．3．2　平均回答分布」参照），学業，課外活動共に「大学」における各場面で必要とされる日本語能力について「毎日」必要という回答が多く（26.7%），「街，病院」各場面では「たまに」がトップであった（32.0%）。また「アパート，アルバイト」では，メディアを利用した個人生活場面では高い必要度があるが（全体「毎日」36.8%，「時々」23.5%，「たまに」17.4%），他の日本人との関わりを持つ場面ではかなり個人差が影響しているようである（「毎日」18.6%，「時々」18.6%，「たまに」26.1%，「不要」13.7%）。この結果から留学生の日本語学習への関心が，まずは大学での活動中心の場面にあることが推測される。したがって日本語の授業を計画する際に，大学で学習や研究を円滑に進められるような技能を伸ばせるように考慮することが重要であると思われる。

表Ⅳ．3．2　平均回答分布

| | 大学 | | アパート，アルバイト | | 街，病院 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 回答数 | % | 回答数 | % | 回答数 | % |
| 0 無回答 | 345 | 21.8 | 314 | 25.3 | 201 | 19.8 |
| 1 不要 | 114 | 7.2 | 135 | 10.9 | 43 | 0.4 |
| 2 他の言語で | 100 | 6.3 | 50 | 4.0 | 18 | 1.8 |
| 3 たまに | 256 | 16.2 | 198 | 15.9 | 325 | 2.9 |
| 4 時々 | 344 | 21.7 | 234 | 18.8 | 242 | 23.8 |
| 5 毎日 | 423 | 26.7 | 312 | 25.1 | 188 | 18.5 |
| 計 | 1582 | | 1243 | | 1017 | |

| | 学業活動 | | 課外活動 | | アパート/下宿/寮 | | メディアの利用 | | アルバイト | | 街 | | 病院／診療所／薬局 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 回答数 | % | 回答数 | % | 回答数 | % | 回答数 | % | 回答数 | % | 回答数 | % | 回答数 | % |
| 0 無回答 | 252 | 22.3 | 93 | 20.6 | 45 | 19.9 | 77 | 13.6 | 192 | 42.5 | 143 | 18.1 | 58 | 25.7 |
| 1 不要 | 76 | 6.7 | 38 | 8.4 | 31 | 13.7 | 13 | 2.3 | 91 | 20.1 | 22 | 2.8 | 21 | 9.3 |
| 2 他の言語で | 90 | 8.0 | 10 | 2.2 | 7 | 3.1 | 36 | 6.4 | 7 | 1.5 | 12 | 1.5 | 6 | 2.7 |
| 3 たまに | 173 | 15.3 | 83 | 18.4 | 59 | 26.1 | 98 | 17.3 | 41 | 9.1 | 248 | 31.4 | 77 | 34.1 |
| 4 時々 | 246 | 21.8 | 98 | 21.7 | 42 | 18.6 | 133 | 23.5 | 59 | 13.1 | 209 | 26.4 | 33 | 14.6 |
| 5 毎日 | 293 | 25.9 | 130 | 28.8 | 42 | 18.6 | 208 | 36.8 | 62 | 13.7 | 157 | 19.8 | 31 | 13.7 |
| 計 | 1130 | | 452 | | 226 | | 565 | | 452 | | 791 | | 226 | |

今回の調査ではこのような大規模な調査が初めての試みであったためにやや問題はあったが，金沢大学での留学生の日本語のニーズを確定するための基礎資料は得られたと思う。またニーズ分析の調査の実施方法についても様々な示唆を得た。今回の調査での問題点としては次のような点が考

えられる。

(1) アンケート形式に慣れていない留学生の場合，こちらの質問意図がうまく伝わりにくい。特に今回の回答対象者の半数を占める中国人学生は選択肢による質問形式に不慣れなようである。

(2) できるだけ回答操作を簡単にするために選択の基準として頻度によるものを用いたが，病気になる場合などは頻度は少なくても生命に関わる重要な日本語能力であることを考慮すると，頻度のみのものさしでは必要度の決定は不十分であった。今後は別の尺度で多面的にニーズを探ってみるべきだろう。

(3) 今回は留学生全体の傾向を探ろうとしたが，留学生のグループ構成要素も複雑で，身分，専門領域，日本語の到達度，経済的条件，家族同伴か単身かなど，日本語能力の必要度を決定するために関わる要素も多く，単純には学習のニーズを確定しにくい。

今回の調査で，この種の調査分析は一度では満足できるような結果はなかなか得られないものだと痛感したが，上記のような問題点について調査方法を再考した上で，今後も機会のあるごとに様々な角度から留学生に必要な日本語能力とは何か検討を続け，少しずつでも留学生の日本語授業に対する要望に応えてゆきたい。

## V　日本語を使う状況

### 1　話す相手

毎日の生活でどんな人とどのぐらい日本語で話しますか。A～Hのそれぞれについて，1～5の中から番号ひとつずつ選んでください。ただし「こんにちは。」などのあいさつをするだけの場合は省いてください。

1　このような人と全然話さない。
2　話はするが，日本語を使わない。
3　たまに話す。
4　時々話す。
5　ほとんど毎日話す。

A　指導教官や授業を取っている先生
B　大学の事務，売店などの人
C　金沢大学の日本人の友達，先輩，後輩
D　金沢大学の留学生
E　他の大学の友達
F　ホストファミリーの家族
G　同じアパートまたは寮の人や管理人
H　A～G以外の日本人の知人

V．1．1　話す相手

| | 指導教官 | | 事務の人他 | | 金大日本人の友人 | | 金大の留学生 | | 他大学友人 | | ホストファミリー | | 管理人 | | その他日本人 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 回答数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| 0 | 4 | 4.0 | 14 | 13.5 | 16 | 15.4 | 19 | 18.6 | 26 | 25.0 | 26 | 25.0 | 29 | 27.9 | 21 | 20.2 |
| 1 | 2 | 2.0 | 1 | 1.0 | 1 | 1.0 | 3 | 2.9 | 17 | 16.3 | 28 | 26.9 | 15 | 14.4 | 8 | 7.7 |
| 2 | 8 | 8.1 | 4 | 3.8 | 3 | 2.9 | 15 | 14.7 | 9 | 8.7 | 4 | 3.8 | 4 | 3.8 | 0 | 0.0 |
| 3 | 16 | 16.2 | 40 | 38.5 | 18 | 17.3 | 39 | 38.2 | 29 | 27.9 | 29 | 27.9 | 31 | 29.8 | 23 | 22.1 |
| 4 | 33 | 33.3 | 33 | 31.4 | 30 | 28.8 | 17 | 16.7 | 15 | 14.4 | 10 | 9.6 | 14 | 13.5 | 29 | 27.9 |
| 5 | 36 | 36.4 | 12 | 11.5 | 36 | 34.6 | 9 | 8.8 | 8 | 7.7 | 7 | 6.7 | 11 | 10.6 | 23 | 22.1 |
| 総数* | 99 | | 104 | | 104 | | 102 | | 104 | | 104 | | 104 | | 104 | |

0：無回答　1：話さない　2：他の言語で話す　3：たまに話す　4：時々話す　5：ほとんど毎日話す

＊「総数」は全回答者113名中より短期滞在特別生グループを除いた4グループ中で各質問への回答者総数をしめす。

「ほとんど毎日」話す相手は，多い順に①指導教官（36）①金大の日本人の友人（36）③その他の日本人（23）④事務の人（12）

「時々」話すのは①指導教官（33）①事務の人（33）③金大の日本人の友人（30）④その他の日本人（29）

「たまに」話すのは①事務の人（40）②金大の留学生（39）③管理人（31）④他大学の友人（29）④ホストファミリー（29）

留学生が日本語を使って話をすることが多い相手は①指導教官②金大の日本人の友人③事務の人④その他の日本人と，四番目まですべて日本人であり，場面は学校の中である。私生活では，学校生活ほど日本語を使っていないようだ。また，ここでは，話す頻度と内容の重要度が明確に分かれていないので，頻度の高い方にやや数字が高く出ているようで，管理人がやや高い数値を示す結果になっている。意外だったのはホストファミリーとの交流があまりないということで，大学というような特殊な環境ではない，一般社会の中で耳から入る自然の日本語に触れる機会があまり多くないようで，残念である。

次に「話はするが日本語を使わない」が，（47／総数825）5.69％と少ないが，これは，留学生が日常的には日本語を使って生活しているということを表していよう。

## 2　話題

| |
|---|
| 日本人と日本語で話すとき，どんな話題で話をすることが多いですか。例をあげてください。 |

以下に項目別に整理したものを挙げる。

(1) 専門又は授業について 37
専門分野について 21
授業や勉強について 13
日本語学習の問題点について 2
研究資料 1
(2) 留学生であるが故の話題 44
日本や日本人の文化，習慣，社会など 17
日本と自国の比較 11
自国について 12
日本との交流について 1
日本の国際化 1
適応，文化差別 2
(3) 社会的話題その他 28
ニュース 4
経済 9
政治 4
法律 1
歴史 5
科学 1
国際情勢 1
社会問題 4
（管理，制度，進歩発展など）
(4) 生活に関連するもの 56
天気 16
日常生活 26
料理や酒 9
電気製品 1
買物 1
家庭（家族の職業） 2
病気 1
(5) 趣味その他 17
スポーツ 5
旅行 1
趣味 2
車 1
ファッション 1
テレビの番組 2
日本の芸能界のはなし 2
恋の話 1
友人の話 2
(6) その他 10
無制限 1
いろいろ 6
相手，状況による 2
個人問題 1

日本人との話題では，「生活に関するもの」(56) が一番多く，続いて「留学生であるが故の話題」(45)「専門又は授業について」(37)「社会的話題その他」(29)「趣味その他」(17) の順である。留学生の日本語の会話では，生活に関するものも多いが，あらたまった話題も多いことがわかる。従って，いわゆる日常会話よりは，程度の高い日本語を中心にした日本語教育が行われるべきではないか，と思われる。

### 3 日本人と話すとき困ること（記述回答総数96）

| |
|---|
| 日本人と話をするとき（日本語以外の言葉を使う場合も含めて），何か困ることがありますか。例をあげてください。 |

項目別に分類したものを次に示す。

(1) 全体的な日本語能力の不足（6）

漠然と日本語の能力不足を感じているものが，6件あった。

(2) 特定の分野における能力不足（43）

「自分の単語力の不足」が20件で，一番問題が大きいようである。つぎに，金沢という土地柄で，「方言（理解できないなど）」が9件，「敬語の使い方」など，敬語に関するものが9件。

「日本人の話し言葉が難しい」2件，「スラングで話したい」「助詞が難しい」「慣用句が困る」が，それぞれ1件ずつである。

(3) 話し手として困ること（12）

話をする時，日本語の能力不足を具体的にどんな形で感じるかを述べている。

つまり，「思うことが（4）短い言葉で（1）上手に（2）話せない」

「特別な場合の言い方（助けてもらいたいとき，用事があるとき）がわからない」（1）

「書き言葉を話し言葉に変えることが難しい」（1）「日本語の話し言葉で自分のことを早口ではっきりと説明できない」（1）などである。

この場合も，語彙力の不足なのか，適切な文型が使いこなせない問題なのか，これだけでははっきりしないが，両方に関係があると考えられる。

その他「自分の発音が悪い」（2）

(4) 聞き手として困ること（10）

会話の相手について，話すスピードが速すぎて困惑しているのが，6件

その他には，「普通話さない話題が初めて出てくるとちょっと困る」（1）といった，直接日本語に関係があるのか，文化的背景によるものなのか（話題の背景にあるものが日本人であれば暗黙の了解事項であるものが，外国人であるが故にわからないという）判断のつきにくいものもある。

他に「文を作ったり，文を関連づける能力が不足している」と感じているものが2件あった。言いたいことを表現するのに最も適切な文型は何かととるか，単純な構文だけではうまく表現できず，会話という短時間の間に，文の構造をどのように組み立てたらよいのか悩んでいるととるか，判断しかねる。他に「ききとり練習が足りない（自分の）」（1）など。

(5) 文化的背景によるもの（7）

「文化や風俗が違い，考え方が違うから，相手の本音がわからない」（4）　「日本語のあいまいな表現やこまかいニュアンスが読めない」（2）　「情緒や感情を表現しようとするとうまくできない」（1）

(6) 日本人の外国人への対応（9）

「（日本人は）相手が日本語を話すのを喜ばず，日本式英語で話したがる」（1）ので，「ちゃんとした日本語を身につけるのが困難であり」「その英語がわからない」（1）とかなり辛辣である。

一方，「日本語ができないので英語で話すと，理解しようとしない」（1）「日本語以外の言葉で話すことがまれ」（1）で「他の言語で自分の考えが述べられない」（1）

「日本人のうちの何人かは日本の中のことしか知らず，外のことが欠落しているように見える」（1）また「いつも〝外人〟をおそれている」（1）　「外国語を学ぶ時，その言語を使うのをおそ

れ間違いを恥じている」（1）と，見えるらしい。そして「冷たい態度以外何もない」（1）

日本人と話すとき困ることは何かというこちらの質問と回答がややずれているものもあるが，われわれがもし彼らの立場にあるなら，やはり同じように感じるのではないだろうか。

(7) 特に問題のないもの（6）

「辞書なしで日本人と日本語で話ができる，それだけで充分」（1）というものをはじめとしてほかに，5件あった。

以上をみてきて，日本語能力に関する問題が多く，特に語彙力の不足をあげるものが多かった。時事問題から専門用語まで単語の巾も広いから，日本語の授業だけではなかなか補いきれないが，しかし日本語の授業のほうでもかなり初期から単語は導入していかなければ間に合わないと思う。また，方言や敬語に困難を覚えているものも多い。また，スムーズな会話が出来ないことに対するもどかしさを訴えるものが多かったが，これも普段の練習がものをいう。教室での会話練習を効果的に指導する必要があるだろう。

## 4 もっと上手になりたいこと

学生がどのような場面で使われる日本語がもっと上手になりたいかを調査するために，Ⅳ章で取り上げた34場面について，さらに以下のような問いを設けた。

> また，これらの場面で日本語をもっと上手に使えるようになりたいと思うものの（　）に，いくつでも○をつけてください。

大学生活については「先生に質問する」を（この項目に答えた40人のうち）26人が選んでいて最も多く，次いで「教科書や参考図書，研究資料を読む」と「日本人の友達とおしゃべりをする」を共に24人が選んでいる。また「先生の講義を聞く」「専門について議論する」と選んだ人も共に23人と多かった。それに対して「クラブ活動に参加する」は11人と最も低く，留学生の生活は学究活動中心で，まず講義を理解でき，積極的に参加できること，それに加えてクラスで友人と楽しく過ごせればより充実した大学生活となるようである。これを身分別にみると，大学院生は専門中心，学部生は一般の学生生活中心という違いが確認できる。大学院生は「先生に質問」「レポートを書く」「専門について議論」「図書館や事務室で係の人に相談する」を共に（大学院生13人のうち）9人が，「教科書や参考図書，研究資料」「学会や研究会で口頭発表する」「日本人の友達とおしゃべり」を共に8人が選んでいて，専門の勉強でより高度な日本語を必要としている。これに対して学部生は大学院生では多数をしめる「実験や演習に参加する」「図書館や事務室で係の人に相談」は最も少なく共に（学部生9人のうち）2人，「専門について議論」「学会発表論文や修士，博士論文を作成する」「学会や研究会で口頭発表」「クラブ活動に参加」が次に少なく共に3人で，大学院生に比べると専門の比重は低い。研究生になると「先生に質問」を全員（研究生7人）が選んでいて，大学生活における指導教官の影響が大きい。

また個人生活について尋ねた「アパート」の項目では「新聞や雑誌を読む」「ラジオやテレビの

ニュース番組を視聴する」を，（この項目に答えた35人のうちの）23人が選んでおり，留学生にとっても新聞，テレビ，ラジオなどの情報のメディアが生活の中で重要な役割をはたしていることがわかる。次に選んだ人が多かったのは「電話で話をする」21人「手紙を書く」20人であった。「大学」の項目と共にこの項目はかなり回答率が高く，留学生の生活も日本人と同じくメディアに対する依存性が高く，それを使いこなせるかどうかに，生活の快適さが左右されることが確認できる。

「アルバイト」においてもっと上手な日本語が必要と答えた人は，いずれの問いに対しても10人前後と少なかった。

また「街」での日本語については「デパートやスーパーで店員と話をする」「銀行や郵便局，市役所などで係りの人と話す」時にもっと上手になりたいと答えた人がいずれも16人で，次に「レストランや喫茶店で注文する」が15人の順であった。

「病院」においては「病気やけがの様子を説明する」が18人「医師の説明を聞く」が16人と上手な日本語を必要とする人が多かった。

以上の34場面に加えて，留学生が日本語の上達を考える際どのような事柄に注目しているかを別の視点からたずねた。

次のことがらの中で，もっと上手にできるようになりたいと思うものにいくつでも○をつけてください。

| | | |
|---|---|---|
| A | 敬語を使って話す | (87人) |
| B | 漢字をおぼえる | (49人) |
| C | 単語をおぼえる | (77人) |
| D | 発音のくせをなおす | (69人) |
| E | 聞き取りの練習をする | (70人) |
| F | 金沢の方言をおぼえる | (36人) |

このほかに，日本語を使うときもっと上手になりたいと思うことがありますか。具体的に書いてください。

この項目については，ほとんど全員（113人）から回答を得ることができた。その結果「敬語を使って話す」を選んだ人が最も多く87人で留学生にとって敬語は無視出来ないことがらであることが確認された。次に「単語をおぼえる」が77人で，「聞き取りの練習をする」「発音のくせをなおす」の順となった。「漢字をおぼえる」になると49人と半数を割り，「金沢の方言をおぼえる」になるとさらに人数は少なくなる。

また自由記述では29の回答があった。内訳は話したり聞いたりする場面に関して９件で「日本人と話すとき」（１）「会話の言葉」（１）「すらすら話せるように」（１）に加えてあいさつやテレビを見るときなどがあり，「日本人のように冗談が言える」（１）「日本人と同じような日本語を話したい」（１）「学会や研究会で自分の考えを発表する」（１）のように，レベルの高いものもあった。書いたり読んだりする場面では12件で，読む技術では「新聞や小説を読む」（２），書く技術では「書

く練習」（4）「論文，レポートの書きかた」（3）で全体の中では書く技術に関するものが多かった。その他には「ことわざについて知りたい」（1）「日本人の発想法を学びたい」（1）などがあった。

| |
|---|
| 日本語の上達や日本文化・社会をもっと理解するために，日本人と接する機会をもっとふやしたいと思いますか。　　はい　　いいえ |

この問いに対しては（94%）にあたる106人が「はい」と答えており，留学生は日本語の上達には日本人と接することが一番であり，その機会の増大をのぞんでいることがあきらかであろう。

## Ⅵ　日本語の授業や大学への希望・要望

### 1　日本語の授業への希望・要望（記述回答総数54）

| |
|---|
| 金沢大学での日本語の授業について希望・要望があったら書いてください。 |

全体として出るであろうと予想される要望は，数は少なくても大体出ているというのが読んだ感想である。中には，われわれが考えていたことを要望として出しているものもあり，補講として実行できるもの，した方がいいものから変えていきたい。つぎに希望・要望を項目別に示す。

(1)　教授内容に対する希望・要望（15）

最も多かったのが「会話練習に力を入れてほしい」（4）次が「文の書き直し」（3）そのほか「作文」（1）「レポート，論文の書き方」（1）「テレビ，新聞が理解できるように」（1）「日本人の話し方（どう話すか）を勉強したい」（1）「やさしい敬語」（1）「テキスト以外の日本語」（1）「文法」（1）「専門の単語」（1）などである。

(2)　教授方法についての要望（11）

実用的な日本語の授業を望む，ごく妥当な次のような声もあった。

「我々にとって日本語は専門ではなく，留学のための道具である。だから，難しいことではなく，相手の話が理解でき，自分の考えを完全に表すことができればよい」（1）

そのほかには「ヒヤリングを増やして」（2）「もっと練習する機会を多く」（1）

また，教師に対する要望も，「もっと質問を出して」（1）「先生の話は速すぎる」（1）といった比較的穏やかなものから，「経験のある日本語教師に教えてもらいたい」（1）「できるだけ系統的にきちんときびしく本格的に教えてほしい」（1）という尤もな要望だと思われるもの，「もっとまじめに教えてほしい」（1）といった，手厳しい批判もあった。

授業に対しても「内容が具体的なほうがよい」（1）「日常生活に偏っている」（1）というものがあった。

(3)　クラス編成に関する要望（9）

「一クラスの人数を少なくしてほしい（練習もよくできる）」（1）日本語の補講の受講生が増え

てくると，どうしても出てくる問題である。

次に「漢字圏と非漢字圏の学生のクラスを分けてほしい」（2）また，非漢字圏留学生からの次のような強い要望があった。「日本語の授業は中国人学生のもの（中国人学生は漢字を知っているから，漢字について他の学生に何の説明もないかあっても不十分である。中国人に漢字を教えるのではなくわれわれに教えるべきである)」（1）これらの問題は，われわれもなるべくその方向で解決したいと思っている。来学期から，週二コマの漢字クラスを設置するよう学校側に要望を出している。

次に「先生ごとに内容と形式を変えてほしい」（1）「クラス1とクラス2はもっと集中的に教えるべきでは」（1）「クラスが多すぎ，一クラスの授業時間が短かすぎる」（1）

初級クラスほど集中して教えるということは，現在もしていることであるが，将来的には一層集中したい，というのはわれわれの考えでもある。教師ごとに内容と形式を変えるというのも，中級クラス以上は現在も実行しているが，更に強化していきたい。

(4) 時間割に関する要望（4）

「授業時間を増やしてほしい」（2）「授業時間を日曜日にできないか」（1）「午前中はゼミがあるから，午後にしてくれ」（1）など，なんとか専門と日本語の授業を両立させたい，という学生の切実な声があった。

(5) クラス新設の要望（4）

「漢字クラス」（2）「上級クラス」（1）「日本語能力テスト受験クラス」（1）それぞれの新設の要望があった。

(6) キャンパスが離れているために出た要望（3）

「近い所で」（1）「角間で」（1）「城内で」（1）授業が受けたい。

(7) その他

「クラスルームがせまい」（1）

(8) 満足しているもの（7）

(9) 特に要望のないもの（8）

以上の要望を見ると，「日本人と話をするとき困ること」で出てきた項目のうち「うまく話せない」に関連するものとしては，「会話の練習をしてほしい」という要望になり，「語彙力の不足」に関連するものとして「やさしい敬語」「テキスト以外の日本語」や「専門の単語」「漢字」を教えてほしいという要望になって表れているといえよう。

「日常生活に偏っている」という意見は，留学生の望む日本語が日常生活レベルより高いのではないか，というわれわれの推測を裏付けるものである。また，書く能力をつけたいという要望も5件あったということは，記述式回答であることを考えると無視できない数である。

## 2 大学に対する要望，希望

| |
|---|
| 日本語の授業以外で，金沢大学に対して希望・要望があったら書いてください。 |

(1) 留学生受け入れ制度に対する要望（3）

「留学生のために活動し，対策を強化してほしい」（2）一人で次のような長い要望を書いたものもあった。「本当に勉強する気のある留学生を受け入れ，その学習内容やレベルを厳しく設定し，研究内容や研究成果に対する評価をしてほしい。日本語が全然できなくても大学院に入れるのは不思議だ。研究業績に基づいて奨学金を出してほしい。外国との研究者交流を積極的に行ってほしい」というのである。どれも当然な要望だと思われる。

(2) 日本人学生や学校スタッフとの交流を望むもの（7）

「課外活動に参加したい」（2）「日本人学生との交流を望む」（4）「学校の留学生係りとの交流を望む」（1）

(3) 生活上の便宜に対する要望（10）

「奨学金を夫婦別々に決定して」（1）「研究生にも出して」（1）「生活上の配慮から出して」（1）など奨学金に関するものが三件。「日本語の先生と一緒に金沢の文化や歴史を見学したい」（1）「旅行や見学を企画して」（2）というもの。「金沢大学の歴史や展望」（1）や「校歌」（1）を知りたいというもの。「チューター制度について質問しているもの」（1）「留学生に対する通知は英語で書いてほしい」（1）という来たばかりの学生からの切実な要望もあった。

(4) 施設その他に対する要望（14）

「留学生専用の寮（2）会館（2）休憩室（1）活動場所（1）などを作ってほしい」というもの。「ＬＬ教室（1）日本語のクラスルーム（視聴覚施設があり，テキストや参考書がいつでも見られる）（1）を作ってほしい」というもの。「外国語の専門書や資料（1）日本語の本や雑誌（4）がほしい（日本では書籍が高価である）」というもの。また「日本語のマニュアルが難しすぎるから英語のコンピューターを買ってほしい」（1）というものもあった。

(5) その他（13）

特に要望のないもの，感謝の言葉がのべられていたもの（10）を含む。

以上，大学に対する要望も，施設や機構に関するものだけでなく，留学生の受け入れに関する真摯な意見が見られた。中には，金沢大学だけでは簡単に解決できないものもあるが，できる限り留学生の要望がかなえられることを願う。

## Ⅶ まとめ

今回の調査の結果を総括すると以下のようである。

〈回答者のプロフィール〉

・回答者数113人（留学生総数143人の79.0%）中，大学院生が49人（回答者の43.4%），研究生28人（24.8%）学部生16人（14.2%）を占める。

・学部別では，経済学部31人（27.4%），工学部23人（20.4%）が多い。

・大学院生グループと研究生グループでは，理系の占める割合が多い。

・出身国別ではアジア出身者が最多94人（83.2%）で，中でも中国が63人（55.8%）を占める。

・私費留学生62人（54.9%）が，公費留学生51人（45.1%）をやや上回る。
・留学理由としては，文系，理系共「学位の取得」をあげた者が最も多く，次いで「日本の研究，技術がすぐれている」「日本の文化・社会への関心」の順である。
・ほとんどの学生が日本を留学先として積極的に選んでいる。
〈日本語学習〉
・金沢大学入学以前の日本語学習期間は，日本国内の学校では3か月～1年に集中。海外の学校では6か月～2年以上に分散。未習者は24人で，6か月以下の学習者とあわせると35人にのぼり，短期間に集中的に日本語能力を養成する必要がある。
・今年度，教養部の「日本語」が必修の学部生を除いた97人中63人が学生部の「日本語（補講）」を受講しており，ほとんどの学生にとってはこの授業が唯一の日本語学習の機会である。
・学習機材は，自宅ではテープレコーダー，テレビ，ラジオが多く使用できるので，これらを利用しての自宅学習課題を与えることは可能である。パソコン，ワープロは大学の設備を使う者が多い。大学において学生が購入できないような学習機材や設備の充実が望まれる。
〈日本語のニーズ〉
・「大学」における各場面では，論文作成や口頭発表のような高度な研究活動やクラブ，サークル活動のように一部の留学生しか参加しない活動を除いては，学業，課外活動の両面で日本語能力は「毎日」必要であるという認識が高い。特に「質問する」「資料を読む」「議論する」「友達とおしゃべりをする」ことは全グループにおいて必要である。「講義を聞く」「ノートをとる」「試験の答案を書く」「レポートを書く」ことは特に学部生に高い必要度が認められる。
・「アパート，アルバイト」各場面では，個人生活において様々なメディアを利用するために日本語が必要だという認識が高いが，アパートの管理人や住人，アルバイト先などで留学生を取り巻く日本人との関わり方は個人差が大きく，したがって日本語の必要度もかなり異なる。
・「街，病院」のほとんどの場面において日本語能力は「たまに」必要であると認識されている。ただし道をたずねたり，交通機関を利用する場面については短期滞在の特別生グループに高い必要度が確認された。
・相対的に「大学」における場面での日本語能力の必要度が他の場面よりも高く認識されている。
〈日本語を使う状況と問題点〉
・留学生が日本語で話をする相手は学校関係者を主とする日本人が多い。
・話題は生活のことについて話すことも多いが，留学生であるための話題（自国と日本についての比較など）や専門や勉学について，社会問題に関するものも多い。
・敬語や語彙についてもっと学習を進め，上手になりたいとの希望がある。
・ほとんどの留学生が日本語上達のために日本人と触れる機会を増やしたいと望んでいる。
〈日本語の授業や大学への要望〉
・日本語の様々な分野（語彙の不足，聴解能力，敬語，漢字など）で留学生は不自由を感じているので，授業において適宜対応したい。
・日本語の教授内容や教授方法などに関して多岐にわたる要望があった。

・大学に対して留学生受け入れ制度に対する要望や，日本人学生，大学スタッフとの交流を望むもの，生活上の便宜に対するもの，施設その他に対するさまざまな要望があった。

## Ⅷ　おわりに

最近の日本語教授法に関する文献などでは，授業計画においてまず学生を知ることが重要であるとか，学習者の日本語学習のニーズを分析することが必要であると強調されている。そこで私たちも金沢大学での現状調査に取り組むことにして，ひとつひとつの質問についてかなりの時間を費やして議論し，質問用紙を何度も書き換えて，「まず一度やってみよう」と調査を開始した次第である。その結果学生部の協力もあって高い回収率を得られ，かなり明確に金沢大学に在籍する留学生の実像を把握することができた。また日本語能力ニーズの分析においても調査の方法にいくつか問題はあったが基礎となる資料を作成することができ，調査結果の今後の分析について多くの示唆が得られた。今回の結果をもとに，さらに詳しく留学生の活動の実態を探りニーズを分析するためには，得られたデータを学部／大学院レベル，専門分野別，あるいは留学費用の負担元（奨学金受領生，私費留学生）などで再分類しても多くの発見があると思われる。

今回は，多数の留学生から日本語学習を中心に留学生活についての生の声を聞くことができたと確信するが，今後も留学生が望む日本語の授業実現のためにさらに彼らの声を拾う努力を重ねて，状況の許す限り要望に応えていきたい。

# 金沢大学外国人留学生の日本語学習に関する調査報告 (2)指導教官

藤田 佐和子　　新村 知子

目次

Ⅰ はじめに（担当：新村）
1 調査の目的
2 調査の実施
Ⅱ 指導教官（回答者）の属性 （新村）
1 学部
2 海外経験
3 指導教官としての経験
Ⅲ 現在指導教官をしている留学生について （新村）
1 指導留学生数・国名・身分
2 指導形態・場所・接する時間
3 使用言語
4 日本語学習への協力
Ⅳ 授業を取っている留学生について （新村）
Ⅴ 日本語能力及び日本語教育に対する要望 （藤田）
1 留学生の日本語能力に対する要望
2 日本語教育に対する要望
Ⅵ まとめ （藤田）
Ⅶ おわりに （藤田）

## Ⅰ はじめに

### 1 調査の目的

この調査は，金沢大学外国人留学生の日本語学習に関する調査報告の一環として，留学生の日本語学習・日本語使用の現状を，指導教官の観点からとらえるために行われたものである。アンケートは，指導教官と留学生を取り巻く日本語環境や，指導教官が日本語教育に対して抱いている期待について理解を深めるために実施され，金沢大学で現在行っている日本語教育に役立てることを最終的な目的としている。学部によって，留学生を取り巻く日本語環境が大きく異なることが予想されるため，本調査では，アンケート回答者を理系グループと文系グループに分け，次の6点について考察した。

1）留学生を教えるときは，どのような指導形態が取られているか。また，授業以外には，どのような場所で，どのくらいの時間接しているか。

2）留学生とは何語で話し，指導の場合は何語の文献を使用しているか。

3）留学生の日本語学習には，どのような協力をしているか。

4）授業だけを担当している留学生に対して，どのような指導形態を取っているか，また，授業以外の活動や日本語学習に関しての協力などで，指導教官をしている留学生への対応とどのように違っているか。

5）留学生にどのような日本語能力を望んでいるか。

6）金沢大学で行われている日本語教育にどのような要望があるか。

### 2　調査の実施

アンケート調査は，金沢大学で平成３年度後期に留学生の指導教官をしている教官を対象とした。アンケートの配布・回収は，金沢大学学生部学生課留学生係の協力を得て，平成４年１月に実施した。その結果，配布した106部のアンケートのうち70部が回収された。（回収率66.0％）

## Ⅱ　指導教官（回答者）の属性

### 1　学部

アンケート回答者70名の所属学部をみると，表Ⅱ．１．１のとおり，回答者70名のうち文系学部が14名，理系学部が45名となっている。教養部と教育学部の11名は，理系・文系の判断が難しい場合が多いので，その他として別項目とした。

表Ⅱ．１．１　アンケート回答者の所属学部

| 文系学部 | | 理系学部 | | その他 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 計14名 | | 計45名 | | 計11名 | |
| （内訳） | | （内訳） | | | |
| 文学部 | 4名 | 理学部 | 7名 | 教養部 | 3名 |
| 法学部 | 3名 | 工学部 | 22名 | 教育学部 | 8名 |
| 経済学部 | 7名 | 医学部 | １１名 | | |
| | | 薬学部 | ３名 | | |
| | | 医療短大 | ２名 | | |

### 2　海外経験

指導教官が海外に滞在し，研究その他の活動を行ったことがある場合に，指導教官をしている留学生（以後「指導留学生」と呼ぶ）への指導の形態や程度が変わってくるという可能性が考えられる。そのため，回答者に，３か月以上海外に滞在した経験があるかどうか，また，あると答えた場合は，国名，滞在期間を示してもらった。

その結果，回答者70名のうち，３か月以上の海外経験があると答えた教官が38名，ない教官が32名であることがわかった。海外経験があると答えた教官の滞在した地域および国名は表Ⅱ．２．１の通りである。これによると，海外で滞在したことのある国は，「アメリカ合衆国」が19名と最も多く，次には，「ドイツ」６名，「イギリス」４名となっている。「アジア」と答えた回答者がわずか４名にすぎないことから，指導教官の海外経験は，アジアの国々よりも欧米の国々がずっと多いこと

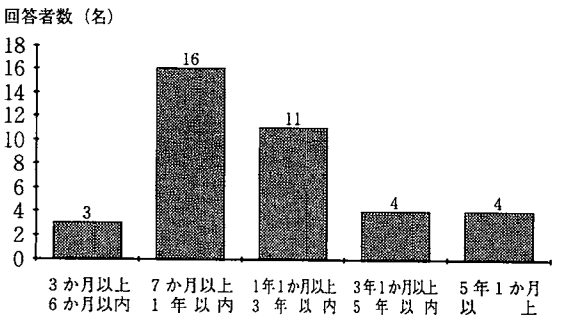
がわかる。また，図Ⅱ．2．2に示した滞在期間は，7か月以上から3年以内であると答えた教官が70%以上を占めるが，5年以上滞在している場合も4例あり，一概に海外経験といっても様々であることがわかる。

表Ⅱ．2．1　指導教官の海外経験（地域および国名）
（あると答えた回答者38名）

| 地域名 | 回答者数 | 主なものの内訳 |
|---|---|---|
| アジア | 4 | 中国　2名 |
| 北米 | 20 | アメリカ合衆国　19名 |
| ヨーロッパ | 13 | ドイツ6名　イギリス4名 |
| その他 | 3 | |
| 不明 | 2 | |

（複数回答あり）

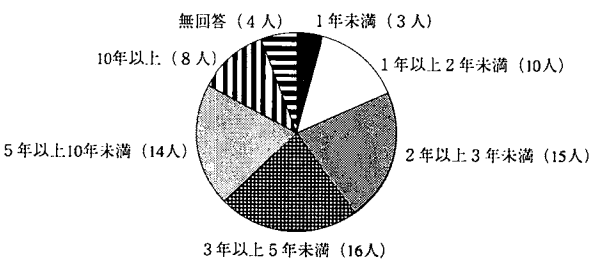
図Ⅱ．2．2　指導教官の海外経験（滞在期間）




## 3　指導教官としての経験

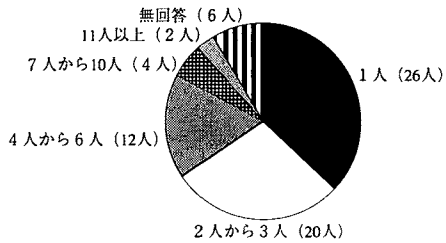
次に，留学生の指導教官としての今までの経験について考察してみた。他機関におけるものを含めた指導教官としての通算の経験年数は，図Ⅱ．3．1の通りである。このデータによると，分布の中心は「3年以上5年未満」となっており，「10年以上」という教官も8名みられる。

図Ⅱ．3．1　指導教官としての経験年数



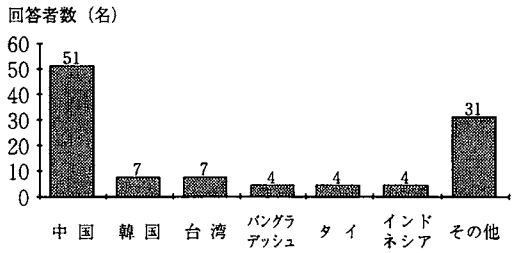
現在までに担当した留学生数に関しては，図Ⅱ．3．2にみられるように，「1人」という回答が26名と最も多く，「2人～3人」の20名を加えると回答者の過半数を大きく越えている。したがって，教官の指導の通算経験年数は多いが，担当した留学生は1人から3人と少ない場合が多いと考えられる。

図Ⅱ.3.2　現在までの指導留学生



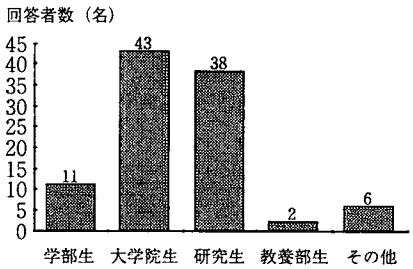

さらに，各回答者にこれまでの指導留学生の出身国を多いものから3つ書いてもらった。それを集計したものが，図Ⅱ．3．3である。最も多いのが「中国」の51名，それ以外は数はずっと少なくなるが，「韓国」と「台湾」の7名，「バングラディシュ」，「タイ」，「インドネシア」は4名となっている。

図Ⅱ.3.3　指導留学生の出身国




また，指導留学生の身分を答えてもらった結果が，図Ⅱ．3．4である。複数の留学生を指導している回答者には，主なもの2項目まで答えてもらった。最も多いのが「大学院生」の43名，次が「研究生」の38名で，指導留学生の81％は，この二つの身分のどちらかに属していたということが言える。

図Ⅱ.3.4　指導留学生の身分

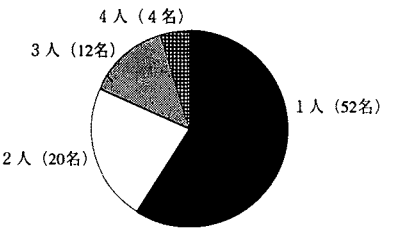


## Ⅲ　現在指導教官をしている学生について

### 1　指導留学生数・国名・身分

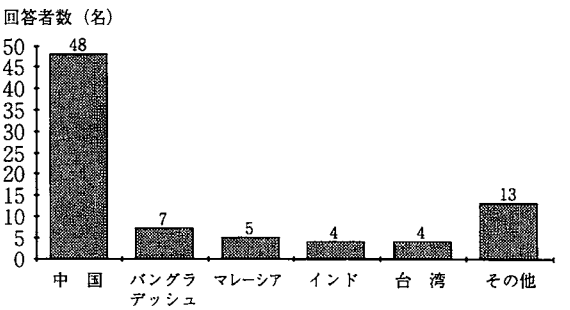
前章では，指導教官としての経験について見たが，この節では現在の状況をまとめてみよう。現在の指導留学生の数は，図Ⅲ．1．1に示されるように，回答者70名中52名が「1人」だけと答えている。

図Ⅲ.1.1　現在の指導留学生数



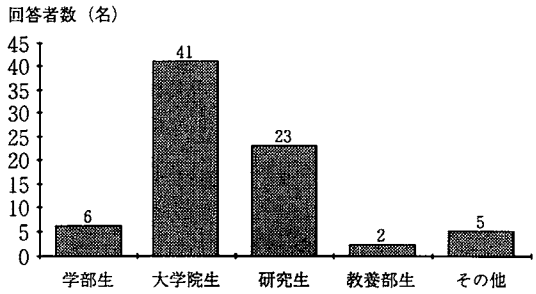

また，その指導留学生の出身国は，前章でみた結果と同様に，「中国」が48名と一番多い。（図Ⅲ．1．2，複数回答あり）その他には，「バングラディシュ」が7名，「マレーシア」5名，「インド」と「台湾」が4名となっている。

図Ⅲ．1．2　現在の指導留学生の出身国




さらに，指導学生の身分は，図Ⅲ．1．3に示されるように，「大学院生」が41名と最も多く，続いて「研究生」の23名となっており，この2項目で全体の83%に達する。

図Ⅲ.1.3　現在の指導学生の身分

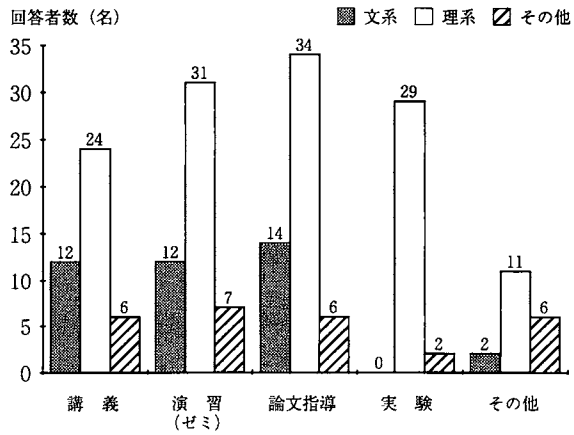



## 2　指導形態・場面・接する時間

大学における日本語教育を効果的に行うためには，外国人留学生が専門の学習・研究活動で，どういう指導を受けているのか，つまり，どういう日本語能力を必要としているのかを知ることが不可欠である。したがって，指導教官が担当留学生に，どのような指導形態で，どの程度接しているかを知ることは，大きな意味がある。

まず，指導形態の状況は，図Ⅲ.2.1に示した通りである。このデータによると，全体的には「論文指導」が最も多く54名，次に「演習（ゼミ）」50名，そして「講義」42名となっている。（複数回答あり）さらに，文系・理系別に見ると，文系では「講義」・「演習」・「論文指導」の3項目に関して，それぞれほとんど全員の回答者が行っていると答えている。理系では，回答者45名のうち，「論文指導」34名，「演習」31名の次に「実験」29名があげられており，「講義」24名より回答数が多くなっている。

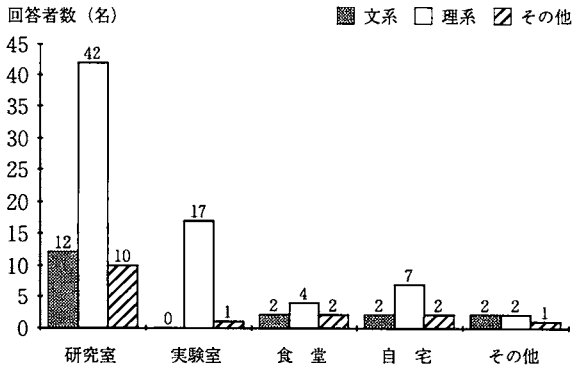
図Ⅲ.2.1　留学生に対する指導形態




どこで留学生と接しているかは，図Ⅲ.2.2に示した通りである。この結果によると，文系・理系にかかわらず，「研究室で」接する教官がもっとも多いということがわかる。また，指導形態の結

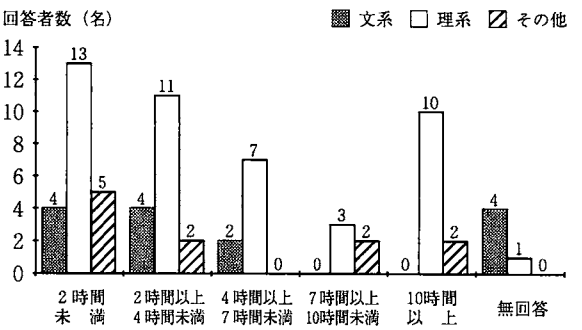
果からも予想されるように，理系では「実験室」と答えた教官が17名いる。

図Ⅲ.2.2　指導留学生と接する場所




授業以外で指導留学生と何時間接しているかでは，文系と理系の違いがかなり明らかに示されている。図Ⅲ.2.3を参照すると，文系学部ではすべての回答者が週7時間未満と答えていることがわかる。それに対し，理系学部では2時間未満と答えている教官が13名いるが，週10時間以上と答えている教官も10名おり，学部・教官によって多様であることがわかる。さらに，この「10時間以上」という回答例をみると，「週60時間」あるいは「毎日，一日中」という極端に多いものがいくつか見られる。

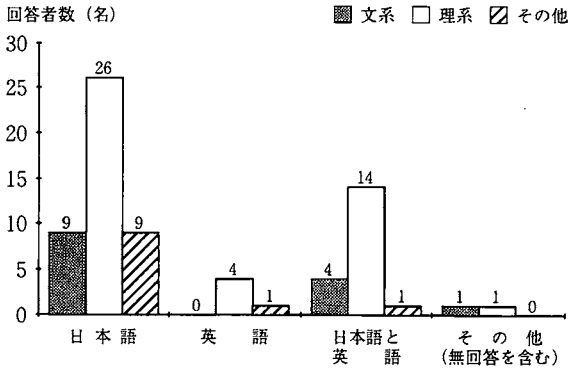
図Ⅲ.2.3　指導留学生と接する時間（週あたり時間数）




## 3　使用言語

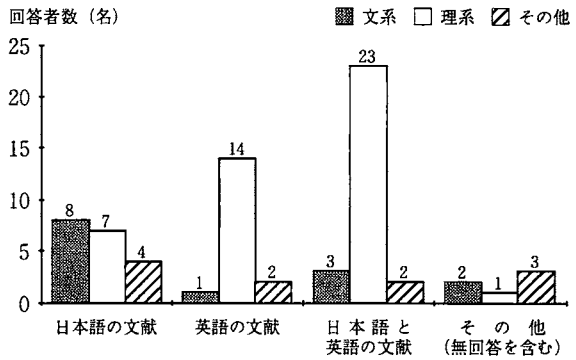
［授業における話し言葉］に関しては，図Ⅲ.3.1に示されているように，文系・理系とも「日本語」のみを使っている教官が過半数を占めている。しかしながら，理系学部では，「英語」のみを使用しているのが4名，「英語と日本語」を使用しているのが14名で，併せて18名となっており，高度な日本語聴解能力を必要としない場合も多いことが推測される。

図Ⅲ.3.1　授業における話し言葉



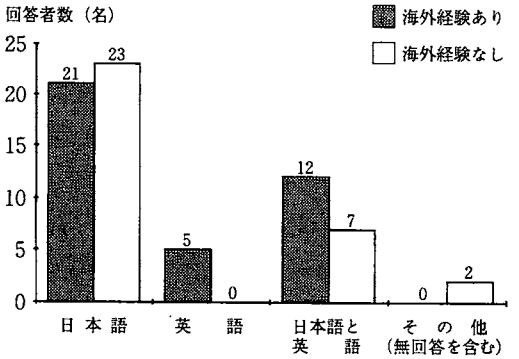

図Ⅲ.3.2の［使用文献］のデータをみると，さらに理系と文系の違いがはっきりと示されている。文系では，14名中8名の教官が「日本語」の文献のみを使っているのに対し，理系では45名中「日本語」の文献のみを使用しているのはわずか7名，「日本語と英語」の文献を使用しているのが23名，「英語」の文献のみと答えたのが14名となっている。一方で，理系の中にも，少数ではあるが，日本語の文献しか使用しない教官もいることがこの結果からわかる。

図Ⅲ.3.2　使用文献

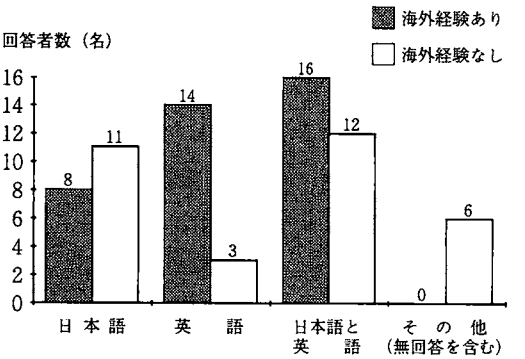



この指導の際の言語使用状況を，教官の海外経験に照らし合わせてみたのが，図Ⅲ.3.3及び4である。まず，［授業における話し言葉］に関するデータを見るかぎりでは，3か月以上の海外経験のある教官38名と海外経験のない教官32名の間には，大きなパターンの相違はなく，どちらも大半が日本語のみを話している。ただし，海外経験のある教官のうち5名が，指導の際英語しか話さないことがわかる。［使用する文献］においては，もっと顕著な差が見られる。海外経験のある教官のうち14名が，「英語」の文献のみを使っているのに対し，経験のない教官では3名しかいない。このことから，教官の海外経験の影響は，話し言葉よりもむしろ使用文献の言語に表れているように思われる。

図Ⅲ.3.3　授業における話し言葉（海外経験との関係）



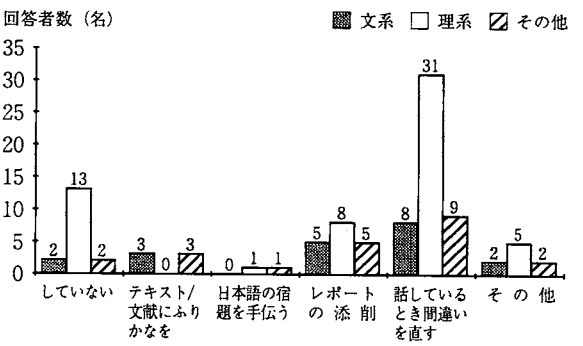

図Ⅲ.3.4　使用文献（海外経験との関係）




## 4　日本語学習への協力

それぞれの指導教官が，留学生の日本語学習に対してどのような協力をしているかは，日本語教育に携わるものにとって非常に興味のあることである。これに関しては，図Ⅲ.4.1のような結果が得られた。全体としては，最も多いのは「話しているとき間違いを直す」（48名）ということである。その次に多いのが，「レポートの添削」（18名）というものである。また，理系では3分の1近く（45名中13名）の教官が，「していない」と答えている。一方文系では，「していない」教官は14名中2名しかいないのに対して，「テキスト／文献にふりがなをつけている」教官が3名いた。このデータで見るかぎり，文系の指導教官の方が理系の指導教官よりも，留学生の日本語学習に協力的であると言えるだろう。

図Ⅲ.4.1　留学生の日本語学習への協力



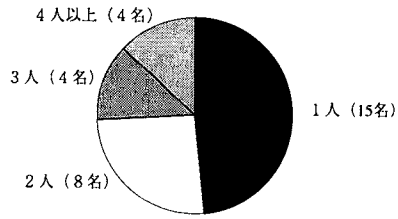

# Ⅳ　授業を取っている学生について

前章では，指導教官の外国人留学生に対する指導の実態をみたが，この章では，指導教官はしていないが，授業で教えているだけの留学生（以後「授業留学生」と呼ぶ）について調べてみよう。まず，授業留学生に関しては，回答者70名のうち31名しか回答していない。アンケートには，「該当

する学生がいない場合は，次の項目へお進みください。」と書いてあったのだが，本当に残り39名の回答者の授業には，全く外国人留学生がいないのであろうか。または，十分な情報や興味がなく，データとして出すには不十分だという理由で無回答だという可能性も考えられる。

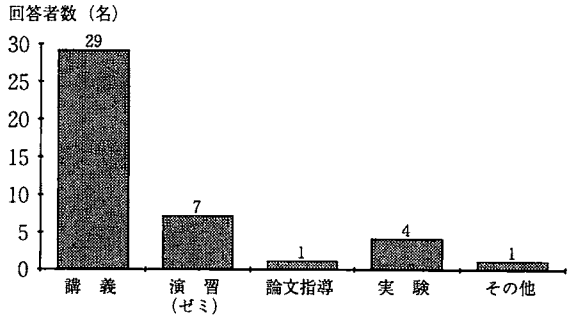
現在，授業留学生が何人いるかという質問に対しては，「１人」と答えた教官が15名で最も多く，「２人」が８名，「３人」が４名，その他４名となっており，予想に反して学生数は非常に少ない。（図Ⅳ．1）

図Ⅳ.1　授業留学生




授業留学生に対する指導形態は図Ⅳ．2に示した。これは，指導留学生への指導形態と比較すると，かなり違った傾向が見られた。（図Ⅲ．1．1参照）指導留学生に対しては，「論文指導」，「演習（ゼミ）」，「講義」の順で多かった指導形態は，授業学生に関しては，「講義」が29名と最も多く，後は「演習（ゼミ）」の７名，「実験」の４名というように，極端に少なくなっており，「講義」だけで接している場合がほとんどであると言えるだろう。

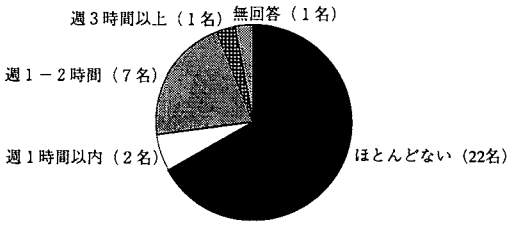
図Ⅳ.2　授業学生に対する指導形態



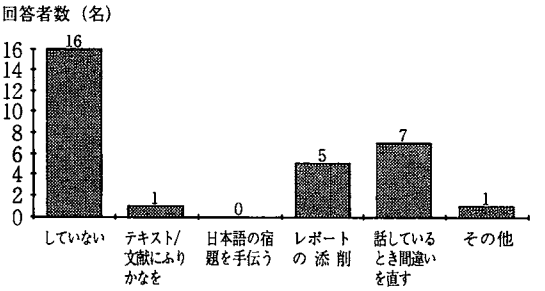

また，授業留学生と接する時間も，「ほとんどない」と答えている教官が，22名で７割以上をしめ，「週３時間以上」と答えた教官は１名だけだった。（図Ⅳ．3）図Ⅲ．2．3に示された指導教官が留学生と接する時間と比較すると，授業を取っている留学生との接触時間は非常に少ないと言わねばならない。さらに，留学生の日本語学習にどういう協力をしているかという質問の結果は，これを確認する形になっており，31名中半数以上の16名が「していない」と答えている。（図Ⅳ．4）ま

た，「話しているとき間違いを直す」としたものが7名，「レポートを添削している」のが5名と，非常に少ない数を示している。これも，指導留学生に対しては「していない」と答えた回答者が70名中17名しかいなかったのに比べると，授業を取っている学生との接触の少なさを示している。（図Ⅲ．4．1参照）

図Ⅳ.3　授業学生と接する時間（週あたり時間数）




図Ⅳ.4　授業留学生の日本語学習への協力




これらの結果から，授業留学生の教官との関係は，講義にでているだけになりやすく，日本語学習に関しての協力もほとんど受けていないことがあきらかとなった。

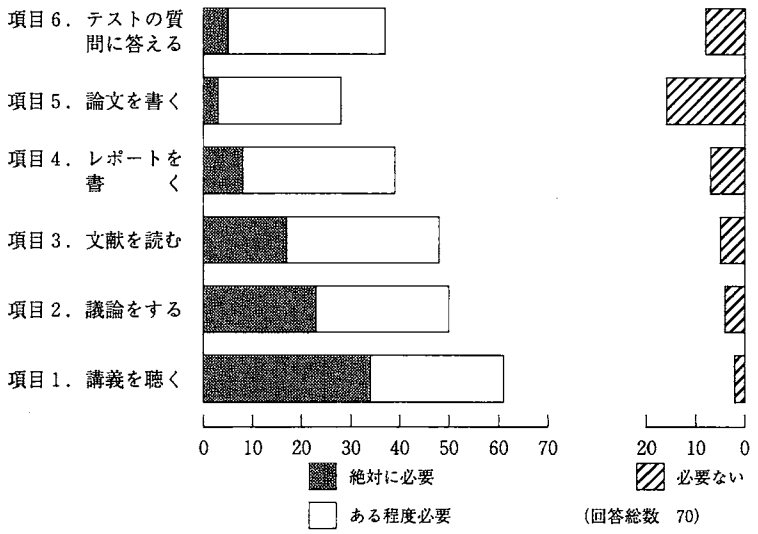
## Ⅴ　日本語能力及び日本語教育に対する要望

### 1　留学生の日本語能力に対する要望

指導教官が，留学生にどのような日本語能力を望んでいるかについて調査するために，【講義を聴く】【議論をする】【文献を読む】【レポートを書く】【論文を書く】【テストの質問に答える】の6項目に関して，絶対に必要であるもの，ある程度必要であるもの，必要ないものを選んで印を付けてもらったところ，図Ⅴ．1．1のような結果になった。

回答は，該当するものを選んで印をつけるという形式であるため，無記入のものもあり，項目ごとの記入総数は一定しない。そこで，回答率を項目の下に示し，回答されたものについてのみ，そのパーセンテージを文系・理系別のグラフにすることにした。

図V.1　留学生に望む日本語能力




項目1【講義を聴く】能力について

（回答率91.4%　内訳：文系71.4%　理系95.6%　その他100%）

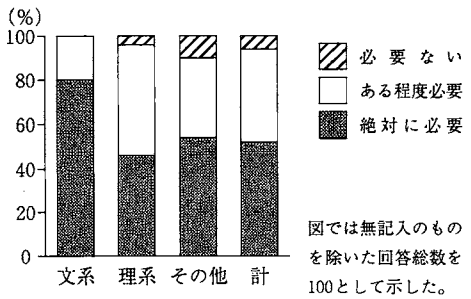
「絶対に必要である」／「ある程度必要である」とした回答が6項目中もっとも多かったのが，この項目である。

また，回答率が6項目中もっとも高かったのも，この項目である。無記入のものが少ないということも，この項目に対する関心の高さ，ニーズの高さを示すものであると考えられよう。

「必要ない」とした回答の数も，6項目中もっとも少ない3（内訳　回答総数64中理系2，その他1）であった。これも【講義を聴く】能力のニーズの高さを示すものであると考えられる。

回答されたものについて，文系・理系別に整理すると，次のようになる。

図V.1.1　講義を聴く




文系では，回答されたもののすべてが「絶対に必要である」／「ある程度必要である」であり，しかもその内訳を見ると，「絶対に必要である」としたものが8割にもなっている。

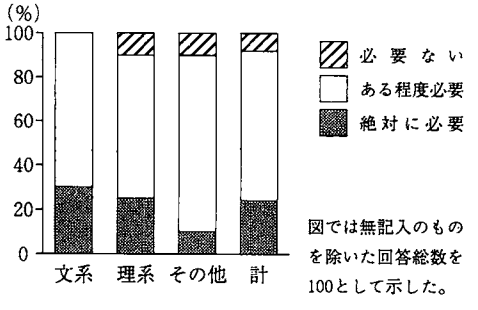
また，回答率が95.6%と高い理系で「絶対に必要である」／「ある程度必要である」があわせて95.3%の高率になっていることも目をひく。研究生や院生等による実験等が多く，講義を聴く能力のニーズはさほどないだろうと予想された理系において，95%を越える予想を上回る高率で，講義を聴く能力が必要とされているということは，今後考えていかなければならない点であろう。

項目2【議論をする】能力について

（回答率78.6%　内訳：文系71.4%　理系80.0%　その他81.8%）

【講義を聴く】能力に次いで必要とされた回答数が多かったのが，この項目である。【講義を聴く】同様，文系では記入されたもののすべてが「絶対に必要である」／「ある程度必要である」である。

図V.1.2　議論をする

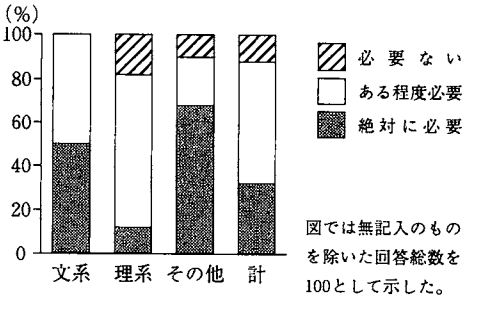



「絶対に必要である」と「ある程度必要である」をあわせたものの割合は，【講義を聴く】の場合とさほど変わらないが，【講義を聴く】では「絶対に必要である」とした回答がかなり高率であったのに対して，【議論をする】では，「絶対に必要である」は少なくなり，「ある程度必要である」が多くなっている。議論をする能力に対するニーズは，【講義を聴く】ほど高くはなく，できた方が望ましいと考える教官が多いということであろう。

項目3【文献を読む】能力について

（回答率78.6%　内訳：文系100%　理系71.1%　その他81.8%）

図V.1.3　文献を読む



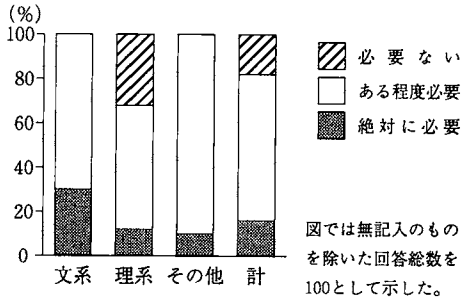
文系の教官の回答は，他の項目では回答率が低いのだが，【文献を読む】能力だけは回答率が100％であり，また回答者全員が「絶対に必要である」／「ある程度必要である」としている。「絶対に必要である」と「ある程度必要である」の割合は半々となっている。

それに対して，理系では「絶対に必要である」とした人は12.5％にすぎず，さらに，18.8％が「必要ない」と回答しており，数字にも文系・理系の差がはっきり出ることとなった。

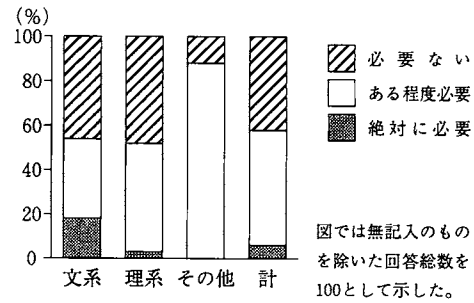
項目４【レポートを書く】能力について
（回答率68.6％　内訳：文系71.4％　理系64.4％　その他81.8％）

項目５【論文を書く】能力について
（回答率68.6％　内訳：文系78.6％　理系64.4％　その他72.7％）

図Ⅴ.１.４　レポートを書く




図Ⅴ.１.５　論文を書く

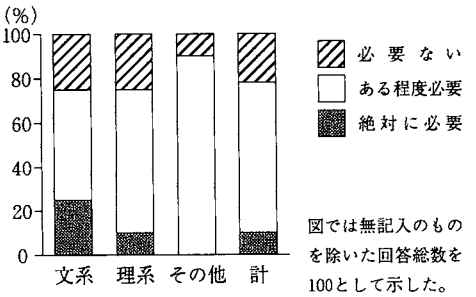



書く能力のニーズについては，文系・理系で差があるだろうと予想していたが，やはり予想どおりであった。もっとも【論文を書く】能力については，差はさほど顕著ではない。６項目中「必要ない」という回答がもっとも多かったのが，この項目５【論文を書く】であり，「必要ない」のパーセンテージは文系で45.4％，理系48.3％である。また，「絶対に必要である」は理系では回答者45名中１名，文系でも14名中２名にすぎない。

【レポートを書く】能力ということになると，文系では回答者全員が「絶対に必要である」／「ある程度必要である」としており，教官の側にはレポートくらいは書けてほしいという要望があることがわかる。理系ではレポートも31.3％の教官が不要としており，ニーズに差が見られる。また，【論文を書く】【レポートを書く】の項目は，次の【テストの質問に答える】の項目とともに回答率（特に理系の教官の回答率）がもっとも低い項目である。無回答は「特に要望はない」ということであると考えられるため，現状のままでもかまわないとする教官が多いのかもしれない。理系の書く能力に対するニーズはあまり高くないと考えてよいのではないだろうか。

項目６【テストの質問に答える】
（回答率67.1％　内訳：文系57.1％　理系64.4％　その他90.9％）

図V.1.6　テストの質問に答える




【テストの質問に答える】能力は「必要ない」とした回答の数が6項目中2番目に多い項目である。また,「絶対に必要である」とした回答の数は2番目に少ない。したがって,【テストの質問に答える】能力の必要度はあまり高くないと考えてよいだろう。回答率も67.1%と低いが，これも【テストの質問に答える】能力に対するニーズの低さを表しているものと思われる。

四技能（聴く・話す・読む・書く）という面から考えてみよう。聴く能力（【講義を聴く】）については，予想をはるかに上回る高率で必要とされていることがわかった。文系でも，回答者のすべてによって必要であるとされているが，理系での高率（95.3%）には特筆すべきものがある。また聴く・話すの総合的な能力が必要とされる【議論をする】能力も，そういう能力はあるほうが望ましいとする教官の割合がかなり高率であるということがわかった。

読む能力，書く能力については，予想どおり文系・理系で差が出る結果となった。文系ではすべての回答が【文献を読む】能力,【レポートを書く】能力を必要であるとするものであったが，理系では必要ないとした回答もあった。また,【論文を書く】能力については，あまり必要とされていないことがわかった。

## 2　日本語教育に対する要望

アンケートの最後に，何か特にあればということで自由記述の欄を設けたところ，日本語教育に対する要望を多数いただくことになった。以下，それらについて簡単に述べる。

自由記述で書かれたものは，その内容から大きく2種にわかれる。ひとつは，留学生には生活に使う程度の日本語能力があればよいとする考え方，もうひとつは，ある程度のレベルの日本語能力が専門を勉強するために必要であるとする考え方をあらわしたものである。前者は，日本語の学習は専門の勉強を圧迫しない程度にするべきだと考えることに，後者は専門の勉強に使えるように日本語をもっと勉強するべきだと考えることにつながっていく。

二つの考え方は，いわば正反対ともいうべき考え方なのであるが，数の上からみるとほぼ同数で，しかも，非常に切実な思いから書かれているように見受けられるものが多かった。以下，両者の代表的なものを引用し，それについて少し考えてみることにする。

まず，留学生には生活に使う程度の日本語能力があればよい，日本語学習は専門の勉強を圧迫し

ない程度にするべきだとする前者の考え方に属するものを二つあげる。

入門用のクラスは，毎日午前中に開講されているが，午前中は専門の講義か研究室のゼミが多い。研究に直接日本語は必要ないと判断し，留学生を受け入れているので，午前中は研究室に来れるようにしてもらえないだろうか。つまり日本語の授業は午後に開講してほしい。（工学部）

留学生の日本語教育に日頃からご尽力頂き有難うございます。日頃感じていることを二，三述べさせて頂き，ご要望にしたいと思います。

私の経験では，日本語をいくら勉強してもこれを専門の講義や研究面で活かすことはほとんど不可能です。これは，時間的に無理ということです。即ち，日本語が使えるころには卒業しなければなりません。

その一方で，留学生は日本語クラスに多大の時間を割いています。当研究室では，大学推薦の博士課程の留学生が月～土午前中城内でクラスがあるため，研究室の輪講やゼミに出られません。修士課程の留学生は授業とぶつかって，日本語クラスに出られないため，研究室のゼミを休んで日本語クラスに出たいと言ってきました。このような状況で，留学生が3年間で博士号を取得することはほとんど不可能です。

（中略）

従って，理工系の留学生の日本語クラスは，日本での生活が何とか出来る程度の日本語を目標として，下記の点を配慮して頂きたい。

①専門の勉強，研究時間を圧迫しないこと。

②専門の講義，研究室のゼミとぶつからないこと。ぶつかる場合は，専門を優先できること。

＊もちろん，余裕のある留学生は指導教官と相談して，更にハイレベルの日本語クラスに参加することも可能だと思います。（工学部）

日本語学習のために研究に差し障りが生じるというのは，問題である。生活に使える程度の日本語しか必要がないという学生に対しては，研究のための時間を圧迫しないようシラバスやカリキュラムが編成されることが望ましい。

しかし，現在の金沢大学では，キャンパスが四か所にわたっているにもかかわらず，予算の関係で日本語クラスの授業時間数が制限されているため，各キャンパスでレベル別のクラスを設けることは不可能な状態であり，そのため留学生側に時間的負担を強いることになっている。たとえば，工学部キャンパスには初級クラスが開設されていないので，城内キャンパスでのクラスに出席するために午前中いっぱいを費やしてしまうというような状況が起っている。せめて工学部キャンパスに初級クラスが開設できれば，このような時間の無駄は避けることもできよう。実現には困難もあろうが，考えられるべき点である。

次に，ある程度のレベルの日本語能力が専門を勉強するために必要だとする後者の考え方に属するものを二つあげる。

日本語ができなくても大学で留学生活を送る上で支障がないという分野もあるでしょうが，日本語で書かれた文学作品を研究する分野もあり，分野によって事情は異なると思います。（中略）授業に出てもらっても，初歩からの説明が必要で，授業のレベルがぐんと下がり，他の大学院生に迷惑がかかっていますので，受け入れるさいに，書類をすべて日本語で書かせて，その能力を見るということぐらいしてもよいのではないかと思います。この勢いで留学生が増えていくと，大学院教育のレベルが相当低下してしまうことが懸念されます。（文学部）

特に修士コースでは（卒論に必要な）必須単位を取る必要があり，指導教官以外の講義を5科目以上受けなければなりません。従って，日本語を少なくとも聞く力が必要です。ドクターコースならば日本語ができなくとも修了できますが，マスターコースでは日本語の能力は必要です。（工学部）

日本語能力が充分でないために，研究等に支障があるというのも，非常に大きな問題である。日本語の講義を聴く能力が充分でない学生は，どのように単位を取っているのだろうか。書く能力が充分でない学生は，どのようにしてレポートを書いているのだろうか。そのような力が本当に求められているのだとすれば，これも早急に対処すべき問題であろう。

これらの問題に対処するためには，教官側が学生にどんな日本語能力を求めているかをより明確にし，それに対応したシラバス，カリキュラムを編成することが必要である。現在のクラスはレベル別にわかれているが，このように考えてみるとクラス分けの段階から，レベルだけによらない，ニーズを考慮したより柔軟なクラス分けがなされることが望ましいことがわかる。中級以上のクラスでは必要な技能に応じて技能別のクラスを選択できるようにしたり，初級のクラスでも，日常会話さえできればよい学生のためのクラスと将来文献を読む能力が必要となる学生のためのクラスを分け，日常会話さえできればよい学生のためのクラスでは，極端な考え方をすれば，膨大な時間を必要とする文字の学習をしない等の配慮がなされたりするのが望ましい。柔軟な対応がなされることによって，日本語学習にあてる時間が研究のための時間を圧迫するという問題も，日本語能力が充分でないために研究等に支障が生じるという問題も，ある程度解決することができるかもしれない。予算や日本語教育に携わる教官の問題などもあり，すぐに実現することは難しいかもしれないが，現状の問題を解決するためには，是非とも考えられるべきである。

## Ⅵ まとめ

この調査によって，指導教官の観点から見た留学生の日本語環境について，以下のことが明らか

になった。

1）留学生を指導する形態は，文系・理系を問わず，論文指導，演習（ゼミ），講義の順に多くなっている。但し，理系では64.4%の教官が実験を通しての指導も行っている。

留学生と接する場所は，91.4%が研究室，また理系の37.8%は実験室である。接する時間については，文系・理系で大きな差が見られ，文系では週あたり4時間未満という回答が過半数を占めたのに対して，理系では1時間以内と答えている教官も13名いるが，週10時間以上と答えている教官も10名おり，さらにこの10時間以上という回答の中には「週60時間」，「毎日，一日中」という極端に多い例もいくつか見られた。

2）授業で使う話し言葉は，文系・理系とも「日本語」のみを使っている教官が過半数を占めているが，理系では「英語と日本語」とした教官が14名，「英語」のみとした教官も4名ある。

使用する文献は，文系では14名中8名が「日本語」の文献のみと回答しているのに対して，理系では「日本語」の文献のみと回答しているの45名中わずか7名である。理系で「日本語と英語」と回答した教官は23名，「英語」のみは14名である。

3）日本語学習への協力ということでは，文系・理系とも，最も多いのは「話しているとき間違いを直す」（48名）で，次に多いのが「レポートの添削」（18名）である。また，理系では「していない」とした教官も多かった。

4）授業留学生に対する指導形態は，講義が29名と最も多く，あとは演習（ゼミ）の7名，実験の4名と極端に少なくなっており，指導留学生への指導形態とはかなり違った傾向が見られる。また，日本語学習に対する協力については，「何もしていない」とした回答が過半数を占めている。

5）留学生に望む日本語能力ということでは，【講義を聴く】能力が最も必要であるとされ，文系では回答があったものの100%，理系でも95.3%が「絶対に必要である」／「ある程度必要である」と回答している。また，【議論をする】能力についても，文系・理系ともに必要であるとした回答が多かった。

それに対して【論文を書く】能力，【テストの質問に答える】能力については，文系・理系ともに「必要ない」とした回答がかなり見られた。

【文献を読む】能力，【レポートを書く】能力については，文系では回答があったものの100%が必要であるとしているが，理系では「必要ない」とした回答もかなりあり，文系・理系で差が見られた。

6）金沢大学で行われている日本語教育に対しては，二つの異なった要望が見られた。一つは日本語学習は生活に使う日本語程度でよいとするものであり，もう一つは専門の勉強に使えるレベルの日本語能力が欲しいとするものであった。

## Ⅶ　おわりに

指導教官に対して行ったアンケート調査から，現在金沢大学で行われている日本語教育にどのよ

うな問題があるかということについては，かなり，明らかにすることができた。しかし，ニーズを考慮したカリキュラム編成をするためには，教官側のニーズを，さらに正確に把握することが必要であると考える。

たとえば，今回の調査では，学生の身分によっても必要とされる日本語能力は変わってくるのではないかというような視点は抜けている。今回の調査は，学部によって必要とされる日本語能力が違っているのではないかということに主眼を置いて行ったが，これにさらに身分（博士課程大学院生・修士課程大学院生・研究生・学部生・研究者など）を加えて，どのような日本語能力が求められているかを，追って調査することが望まれる。

アンケートの最後に設けた自由記述の欄は，おそらく大半が空欄のまま返ってくるだろうと予想していたのであるが，予想に反して多くの貴重なコメントをいただき，忙しい時間を割いての回答に頭が下がる思いであった。最後に，調査に協力してくださった指導教官の方々に感謝の意を表して，本稿を終える。

# 資　　料

〈指導教官用アンケート〉

各問について空欄に記入ください。選択肢がある場合は，該当するものの番号に○を付けて下さい。

Ⅰ　先生御自身について

＊氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿（お差し支えなければお願い致します。）

＊年齢 ＿＿＿歳　　＊性別　男・女

＊学部／専攻分野 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊知っている外国語

（主なもの２言語まで記入ください。各言語について，あてはまる下のレベルコードに従って○を付けて下さい）

| 〈言語〉 | 〈聞く・話す〉 | 〈読む・書く〉 |
|---|---|---|
| ＿＿＿＿＿＿ | 1－2－3－4 | 1－2－3－4 |
| ＿＿＿＿＿＿ | 1－2－3－4 | 1－2－3－4 |

レベルコード　1　全然できない　　2　少しできる

3　少し不自由に感じるが使える　4　ほとんど自由に使える

＊海外経験（３か月以上のもので主なもの２件のみ御記入ください）

| 〈国名〉 | 〈期間・時期〉 | 〈目的・身分〉 | 〈主な使用言語〉 |
|---|---|---|---|
| ＿＿＿＿＿＿ | ＿＿年＿＿か月 | 0　観光 | ＿＿＿＿＿＿ |
| | （19＿＿帰国） | 1　学位を取るための留学 | |
| | | 2　研究のための留学 | |
| | | 3　語学を学ぶための留学 | |
| | | 4　海外勤務 | |
| | | 5　家族に同行して | |
| | | 6　その他（　　） | |
| ＿＿＿＿＿＿ | ＿＿年＿＿か月 | 0　観光 | ＿＿＿＿＿＿ |
| | （19＿＿帰国） | 1　学位を取るための留学 | |
| | | 2　研究のための留学 | |
| | | 3　語学を学ぶための留学 | |
| | | 4　海外勤務 | |
| | | 5　家族に同行して | |
| | | 6　その他（　　） | |

＊留学生の指導教官としての経験（他機関においての経験を含む）

留学生の指導教官を何年していますか。　通算　＿＿＿年

今までに何人の留学生を指導しましたか。　＿＿＿人

指導した留学生の出身国を，多いものから３つ書いてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿

指導した留学生の身分はどういうものでしたか。一番多いものに◎，次に多いものに○を付けて下さい。

1　学部生　2　大学院生　3　研究生　4　その他（　　）

Ⅱ　現在担当している留学生について

A　現在指導教官をしている留学生について

＊現在何人の留学生の指導教官をしていますか。　＿＿＿人

＊主なもの２件について御記入ください。

氏名　＿＿＿＿＿＿＿＿学部＿＿＿＿＿　性別　男・女

身分　1　学部生　2　大学院生　3　研究生　4　その他（　　）

出身国　＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名　＿＿＿＿＿＿＿＿学部＿＿＿＿＿　性別　男・女

身分　1　学部生　2　大学院生　3　研究生　4　その他（　　）

出身国　＿＿＿＿＿＿＿＿

＊その留学生に対してどのような形で指導していますか。

（あてはまるものすべてに○を付けてください。）

1　講義　2　演習（ゼミ）　3　論文指導　4　実験　5　その他（　　）

＊その授業／指導をする際に使用している言語を書いて下さい。

（２つある場合は両方○を付けてください。）

1　日本語　2　英語　3　その学生の母語　4　その他（　　）

＊その授業／指導をする際に使う文献は何語で書かれていますか。

（２つある場合は両方書いてください。）

1　日本語　2　英語　3　その学生の母語　4　その他（　　）

＊その留学生と授業以外で接する機会はどのくらいありますか。

（１～３のうちからひとつ選んで○を付け，空欄を埋めて下さい。）

1　ほとんどない　2　ある（週　　時間）

＊その留学生と授業以外で接するときはどういう場面の時が多いですか。

1　研究室で　2　実験室で　3　食堂で　4　自宅で　5　その他（　　）

＊その留学生と授業以外で接するときに使用する言語は何ですか。
（2つある場合は両方に○を付けて下さい。）
1　日本語　2　英語　3　その学生の母語（　　語）　4　その他　（　　）

上の質問で，2つ以上の言語に○を付けた方のうち場面によって使い分けている方は，どういうときにどの言語を使っているのか，下の空欄に簡単に御説明下さい。
（　　）

＊その留学生の日本語学習にどのような協力をしていますか。
1　していない
2　テキスト／文献にふりがなをつける
3　日本語の宿題を手伝う
4　レポートを添削している
5　話しているときに間違いに気付いたら直している
6　その他（　　）

B　指導教官はしていないが先生の授業を取っている学生について
（該当する学生がいない場合は，次ページのⅢへお進み下さい。）

＊およそ何人の留学生が先生の授業を取っていますか。　＿＿＿人
（これ以後は，主なもの2つまでお答えください。

＊学部　＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿

＊身分
1　学部生　2　大学院生　3　研究生　4　その他（　　）

＊出身国　＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿

＊その留学生たちに対して，どのような形で指導していますか。
（あるもの全部お答えください。）
1　講義　2　演習（ゼミ）　3　論文指導　4　実験　5　その他（　　）

＊その授業／指導をする際に使用している言語
（2つある場合は両方○を付けて下さい。）
1　日本語　2　英語　3　その学生の母語（　　語）　4　その他（　　）

＊その授業／指導をする際に使う文献は何語で書かれていますか。
（2つある場合は両方○を付けて下さい。）
1　日本語　2　英語　3　その学生の母語（　　語）　4　その他（　　）

＊その留学生たちと授業以外で接する機会はどのくらいありますか。それぞれ該当する留学生の人数でお答えください。

1　ほとんどない　＿＿＿人
2　週1時間以内　＿＿＿人
3　週1－2時間　＿＿＿人
4　週3時間以上　＿＿＿人

＊その留学生と授業以外で接するときはどういう場面の時が多いですか。

1　研究室で　2　実験室で　3　食堂で　4　自宅で　5　その他（　　）

＊その留学生たちと授業以外で接するときに使う言語は何ですか。

（2つある場合は両方○を付けて下さい。）

1　日本語　2　英語　3　その学生の母語（　　語）　4　その他（　　）

＊その留学生の日本語学習にどのような協力をしていますか。

0　していない
1　テキスト／文献にふりがなをつける
2　日本語の宿題を手伝う
3　レポートを添削している
4　話している時，間違いに気付いたら直している
5　その他（　　）

Ⅲ　留学生のコミュニケーション能力について

＊　専門分野によっては，日本語ができなくても大学で留学生活を送る上で支障がないという意見もあります。留学生の日本語能力は，どの程度到達していて欲しいですか。絶対に必要だと思う項目には◎，ある程度必要だと思う項目には○，必要ないと思う項目には×を記入してください。

（　）日本人の先生の講義を聞いて理解できる
（　）日本語の文献が読める
（　）テストの質問に答えられる
（　）日本語でレポートが書ける
（　）日本語で議論ができる
（　）日本語で論文が書ける
（　）その他（　　）

＊最後に，留学生の日本語クラスに関して，御意見・御希望がありましたら，お書きください。

# 金沢大学外国人留学生の日本語学習に関する調査報告 (3)日本人学生

島　弘子・鎌田倫子

目　次

Ⅰ．はじめに
　1．1　調査の目的
　1．2　調査方法と調査内容
　　1．2．1　調査方法
　　1．2．2　調査内容
Ⅱ．回答者プロフィール
Ⅲ．分析
　3．1　留学生と接する時間，場面，言語
　　3．1．1　留学生と接する時間
　　3．1．2　接する場面別時間
　　3．1．3　接する場面別言語
　3．2　留学生への生活面・日本語学習面での協力
　　3．2．1　協力の有無
　　3．2．2　生活面での協力内容
　　3．2．3　日本語学習面での協力内容
　　3．2．4　非協力の理由
　3．3　留学生の日本語理解力と日本人学生の協力
　3．4　留学生の話す日本語や日本語クラスに対する意見・要望
Ⅳ．まとめ
　4．1　全般的な傾向
　4．2　チューター制度について
　4．3　理系と文系
　4．4　その他
Ⅴ．おわりに

## Ⅰ．はじめに

本論は，1991年10月から1992年1月初旬にかけて学生部留学生係の協力で実施した「金沢大学外国人留学生の日本語学習に関するアンケート調査」のうち，日本人学生と留学生との関わりを調査し，分析した報告である。

尚，本稿は，第1章，第2章，3．3を除く第3章，第4章，第5章を島が，データ処理，図作成と第3章3．3を鎌田が分担執筆した。

### 1．1　調査の目的

この調査は，以下の点を明らかにすることを目的とする。

1）日本人学生が留学生と接する場面，言語，時間
2）上記に関する文系，理系別の差異
3）留学生に対する生活面及び日本語学習面での協力の程度と内容
　また，非協力の場合はその理由
4）協力態度や時間に関するチューターと一般学生別の相違
5）日本人学生から見た留学生の日本語理解力，並びに問題点や要望

### 1．2　調査方法と調査内容

#### 1．2．1　調査方法

この調査は，外国人留学生が所属する研究室の日本人学生を対象とした。計106の研究室に対し各2名，もし研究室に現在チューター（注1）をしている学生やこれまでにしたことのある学生がいる場合，2名のうち1名はチューターに回答を依頼した。

回収したアンケート総数は，110通，回収率は51.9%である。しかし，回収されたものの中には，「組織の違いのため，研究室所属の日本人学生がいない」という理由で，白紙で返却されたもの4通が含まれているため，実際の有効数は，106通となり，実質回収率は，50%である。

#### 1．2．2　調査内容

アンケート用紙（資料参照）は，前半が回答者の年齢，性別，所属，留学経験の有無，チューター経験の有無などに関するプロフィールの部分，後半が留学生と接する場面，言語，時間，生活面での協力，日本語学習面での協力，留学生の日本語理解力などをたずねる質問部分からなっている。また，回答欄は質問項目によって選択方式と自由記述とに分かれている。

## Ⅱ．回答者プロフィール

アンケート回答者106名中，男性は86名，女性は20名である。

年齢別に見てみると，表1のとおり，21才から25才までが一番多く80名，次は26才から30才までで12名である。今回，医療技術短期大学部の学生にも協力をお願いしたので18才から20才までの回答者も5名いる。

表1　年令別構成　（単位：人）

| 年　令 | 18～ | 21～ | 26～ | 31～ | 36～ | 41～ | 無回答 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| チューター | 2 | 24 | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 | 32 |
| 一般学生 | 3 | 56 | 8 | 1 | 2 | 2 | 2 | 74 |
| 合　計 | 5 | 80 | 12 | 2 | 3 | 2 | 2 | 106 |

チューター経験の有無に関しては，現在チューターをしている学生及び過去3年間にチューターをした経験のある学生（以後，チューターと略す）が32名（30.2%），チューター経験のない一般学

生（以後，一般学生と略す）は74名（69.8%）となっている。

さらに，所属学部別にみてみると，表２のとおり，工学部39名，教育学部14名，理学部・経済学部各８名，医学部７名，医療短大６名，文学部・法学部・薬学部・自然科学研究科各５名の順となり工学部の学部生・院生が最も多い。

表２　所属学部別構成　（単位：人）

| | 文学部 | | | 教育 | | | 法学 | | | 経済 | | | 理学 | | | 工学 | | | 医学 | | | 薬学 | | | 自科 | | | 医短 | | | 不明 | | | 計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 | 学 | 院 | 他 |
| チューター | | 1 | | 2 | 2 | | | 1 | | | | | | 2 | | | 15 | | | 1 | | | | 2 | | 2 | | | | 2 | | 2 | | 2 | 26 | 4 |
| 一般学生 | 3 | 1 | | 5 | 5 | | 2 | 2 | | 8 | | | 3 | 3 | | 5 | 19 | | 1 | 3 | 2 | | 3 | | | 3 | | | | 4 | | | 2 | 27 | 39 | 8 |
| 計 | 3 | 2 | | 7 | 7 | | 2 | 3 | | 8 | | | 3 | 5 | | 5 | 34 | | 1 | 4 | 2 | | 3 | 2 | | 5 | | | | 6 | | 2 | 2 | 29 | 65 | 12 |
| 学部別合計 | 5 | | | 14 | | | 5 | | | 8 | | | 8 | | | 39 | | | 7 | | | 5 | | | 5 | | | 6 | | | 4 | | | 106 | | |

文系（文学部，教育学部，経済学部，法学部）と理系（理学部，工学部，医学部，薬学部，自然科学科，医療短大）の点から大別すると，表３のとおり，理系の回答者は70名（66.0%）で，文系の回答者は32名（30.2%），不明４名（ 3.8%）である。学部生：大学院生：その他（医局員や短大生など）の比率は約３：６：１で，それぞれ29名，65名，12名である。大学院生の回答者が際立って多い。

日本人学生の中で，３か月以上の海外滞在経験者は，８名（その内，チューターでは２名）おり，チューターと一般学生とで海外経験の比率に差異は見られない。

知っている外国語（複数回答）の第１位は，英語80名，２位はドイツ語20名，３位は中国語12名である。中国語への関心の高さは，中国からの留学生の多い大学の現状を反映していると思われる。ちなみに，チューター32名が担当している，又は担当していた留学生の国別をみると，表４のとおり，中国が一番多く21名で，２位のインドネシア３名，バングラディシュ３名を大きく引き離している。

表３　文系・理系別構成　（単位：人）

| | 学部 | 大学院 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 文　系 | 20 | 12 | 0 | 32 |
| 理　系 | 9 | 51 | 10 | 70 |
| 不　明 | 0 | 2 | 2 | 4 |
| 合　計 | 29 | 65 | 12 | 106 |

表４　チューターの相手国　（単位：人）

| アジア | | ヨーロッパ | | 南北アメリカ | | アフリカ | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中国 | 21 | スペイン | 1 | アメリカ | 1 | タンザニア | 1 |
| 台湾 | 2 | | | ブラジル | 1 | | |
| インドネシア | 3 | | | | | | |
| バングラディシュ | 3 | | | | | | |
| トルコ | 1 | | | | | | |

# Ⅲ．分　　析

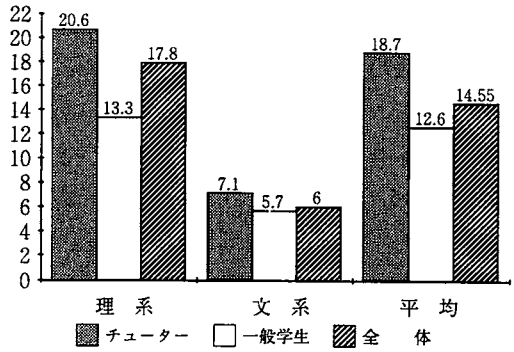
## 3．1　留学生と接する時間，場面，言語

### 3．1．1　留学生と接する時間

留学生と接する週平均時間は，図1のとおり，日本人学生全体で14.6時間であるが，理系学生と文系学生とでは，大きな隔たりがある。

理系では平均17.8時間であるのに対し，文系は平均6.0時間であり，理系が文系の約3倍という結果を示している。

図1　留学生と接する週平均時間




また，理系，文系別にチューターと一般学生の接する時間数を比べてみると，共通してチューターの方が一般学生より留学生と接する時間が長いということがいえる。チューターが接する時間は一般学生に比べ理系で約1.5倍，文系でも約1.2倍の長さである。

学部生と院生とを比べてみると，学部生が7.5時間であるのに対して，院生は17.2時間で院生の方が学部生に比べ留学生と長時間接している。院生のうち，チューターの接する時間数は18.6時間，一般学生の時間数は16.3時間で，チューターの方が僅かに長い。即ち，接する時間に関しては，チューターと一般学生との差異よりも，文系・理系別の差異の方が大きいという結果が出ている。

### 3．1．2　接する場面別時間

講義，ゼミ，実験，休憩時間の4場面で，接する時間の長短を調べてみたのが，図2である。

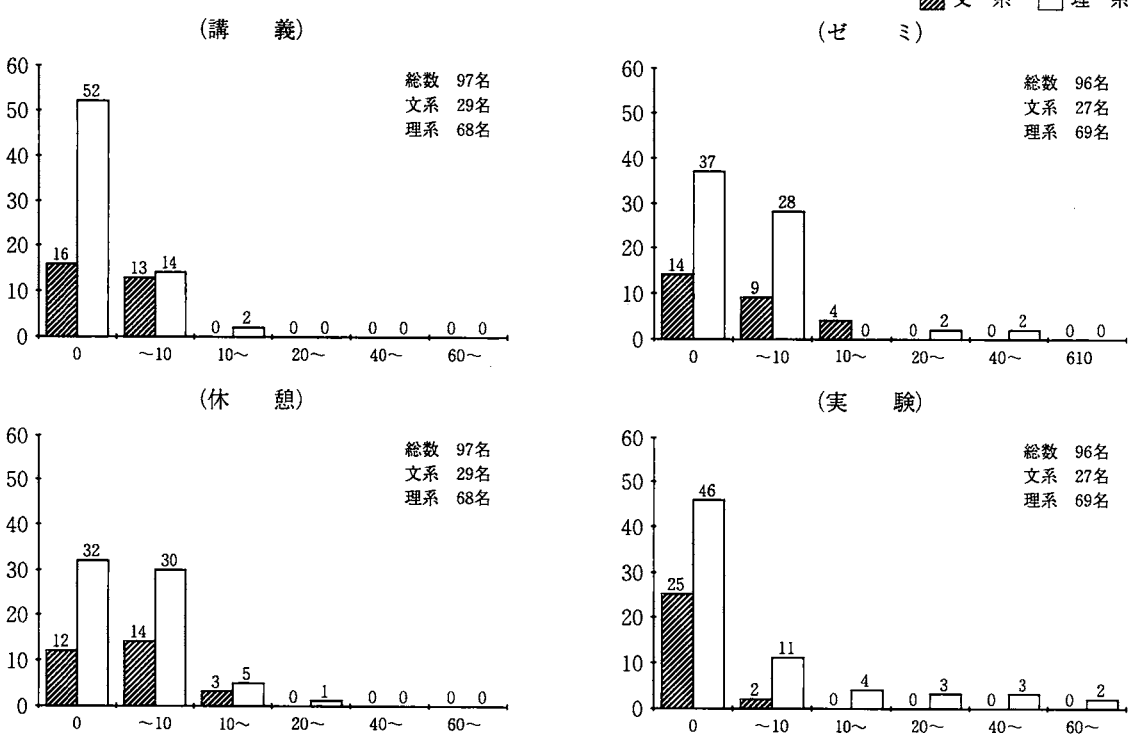
講義では，文系で16名（55.2%）の学生が，理系では52名（76.5%）の学生が「留学生と接していない」という回答を寄せている。そして，理系・文系共に，20時間以上接する学生はいない。

ゼミでは，留学生と接する時間0の理系学生が37名（53.6%）と一番多いが，10時間未満接する学生も28名（40.6%）いる。以下，20時間～40時間，40時間～60時間が各2名ずついて，数は少ないものの長時間留学生と接している学生のいることがわかる。一方，文系では，接する時間0の学生が14名（51.9%），20時間未満の学生が13名（48.1%）とほぼ半数に分かれている。

実験では，留学生と接する時間０の学生が理系で46名，文系で25名と非常に多いが，理系学生に関していえば，10時間未満が11名，10時間～20時間が４名，20時間～40時間が３名，60時間以上が２名と，幅広く分散している。特に40時間以上接する学生が５名いることは特記に値する。

休憩時間については講義，ゼミ，実験の場合と異なる結果がでている。即ち，０時間と10時間未満が同数の44名（45.4%）で，休憩時間では，留学生と接する日本人学生が増えているといえる。

図２　留学生との接触時間




このことから，以下のことがいえる。

(1)　講義，ゼミ，実験いずれも接する時間０の学生が過半数以上おり，この３場面で留学生と接する学生は限られている。

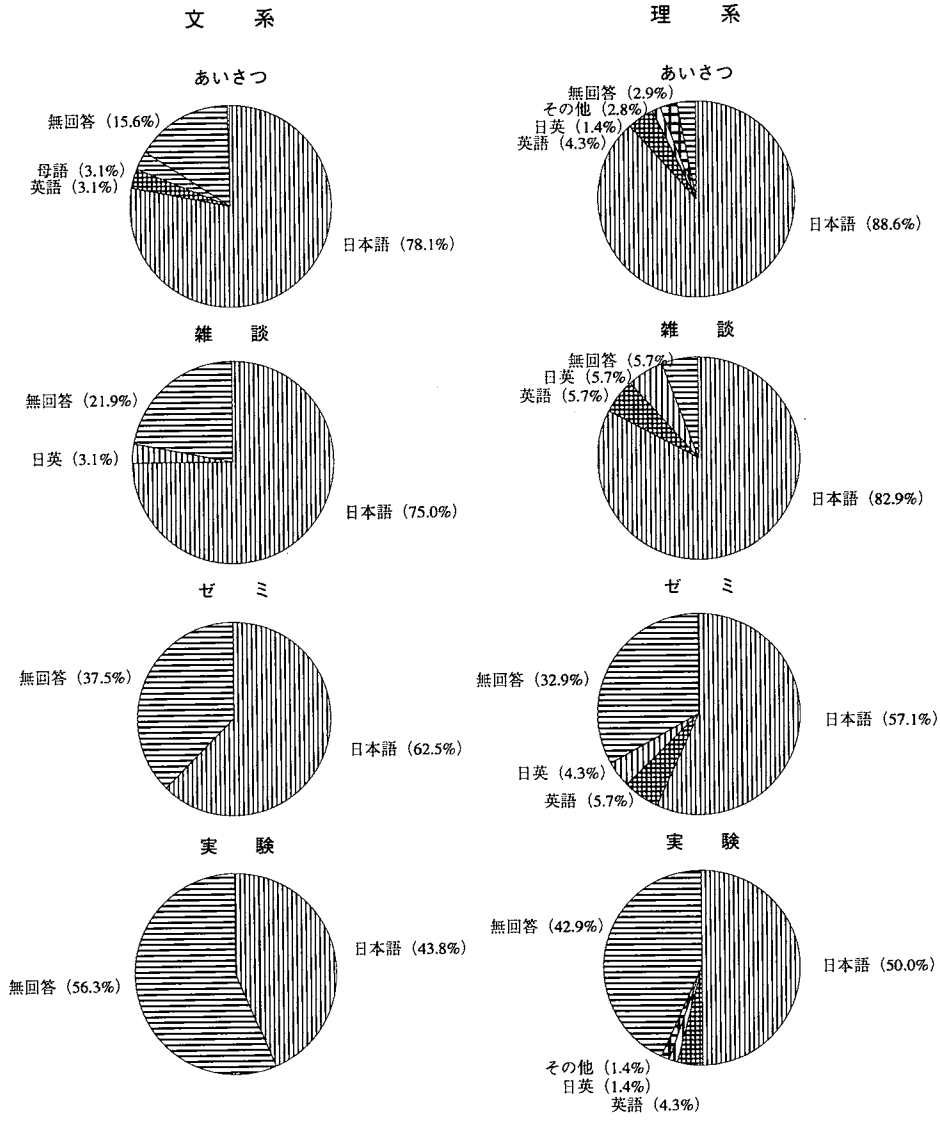
(2)　ゼミで接する時間は，休憩時間に接する時間のパターンに類似していて，10時間未満も割に多く存在する。

(3)　理系では，ゼミと実験の場面で１週間に40時間以上も接する少数の学生がおり，留学生とほとんど１日中行動を共にしていると思われる。

### ３．１．３　接する場面別言語

挨拶，雑談，ゼミ，実験や打ち合わせの場面で学生がどんな言語で留学生と接しているかを調べたものが，図３である。文系では，各場面でほとんど日本語が使われているが，理系（特に，医学部，工学部）では，雑談，ゼミ，実験の場面で「英語」，又は「英語と日本語」も使われている。

図３　場面別使用言語




## ３．２　留学生への生活面・日本語学習面での協力

### ３．２．１　協力の有無

生活面で協力する学生は，図４のように，一般学生では５人に１人しかいない（14名，18.9%）が，チューターの方は過半数の18名（56.3%）おり，チューターの協力意識は高い。

日本語学習面では，図５のとおり，チューターの90.6%（29名）が協力している。一般学生も51.3%（38名）が協力しており，生活協力よりは高い率を示している。生活面，日本語学習の両面でチューターは一般学生よりはるかに高い協力の割合を示している。

図4　生活面での協力の有無

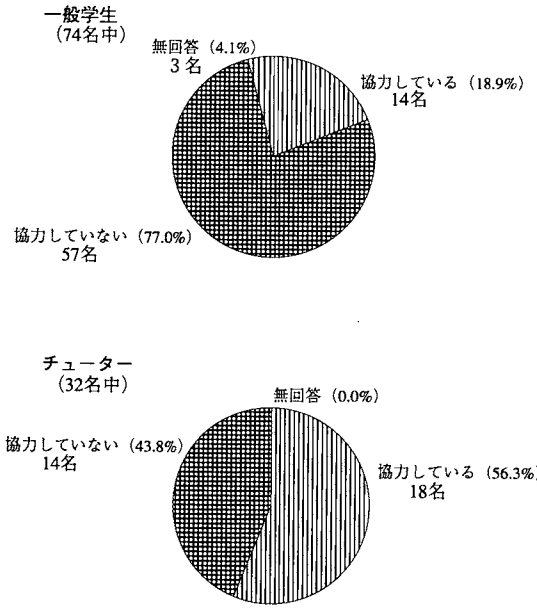
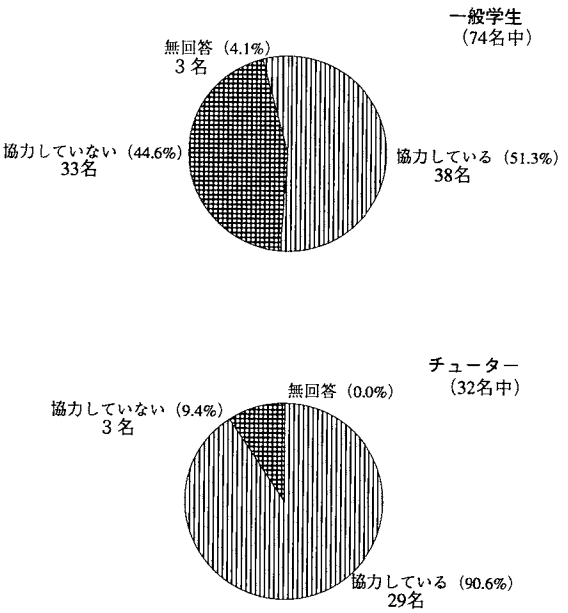



図5　日本語学習面での協力の有無




### 3．2．2　生活面での協力内容

生活面で協力すると答えた32名について，その協力内容を示したのが，図6である。市内案内，大学構内の案内が一番多く，各15名（28.3%）いる。その他の協力（自由記述）に関しては，様々な回答が返ってきた。チューターからは「来日直後の世話」「日常用品の購入，使用法説明」「車による物品輸送」「物の貸し借り」といった生活面の世話から始まって，「先生からの連絡伝達」「日本語で書かれた文書の内容説明」「進学について」などの学習面での世話をするという回答が寄せられた。一般学生からは，「日常生活全般」「金沢での日常生活全般」の世話や「勉強を教える」といった学習面の世話のほかに，1例だが「電話の権利を貸している」という回答もあった。

### 3．2．3　日本語学習面での協力内容

チューター，一般学生共に協力の内容で一番多かったのは，図7のとおり，「話しているとき間違いに気付いたら直す」（47名）という項目である。これは，誰でも手軽にできる協力形態といえる。そして，指導教官用のアンケートでもこの項目は日本語学習協力の1位を占めており，日本人学生の結果と一致する。2位は，「日本語の勉強の分からない箇所を教える」（31名），3位は，「日本語による講義の分からない箇所があったら教える」（23名），4位は，「レポートを添削する」（12名）となっている。5位以下は「日本語による発表の準備を手伝う」（11名）「テキスト／文献にふりがなをつける」（10名）「その他」（4名）である。「その他」の内容とは，日常会話（「会話のなかでわからない単語の意味を説明する」「ある状況で何というか教える」など）やことわざ・方言についてである。

また2つ以上の項目で協力している回答者は，チューターで17名（53.1%），一般学生で23名

（31.1%）いる。ここでもチューターの協力の高さがうかがえる。

図６　生活協力の内訳

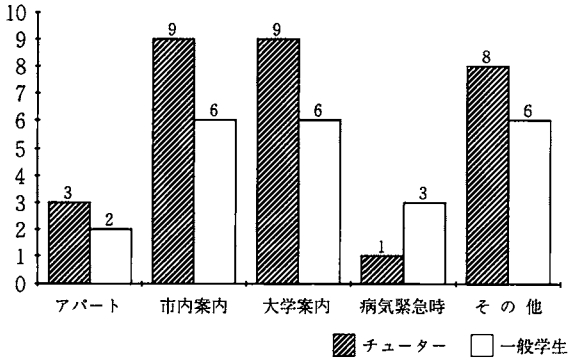
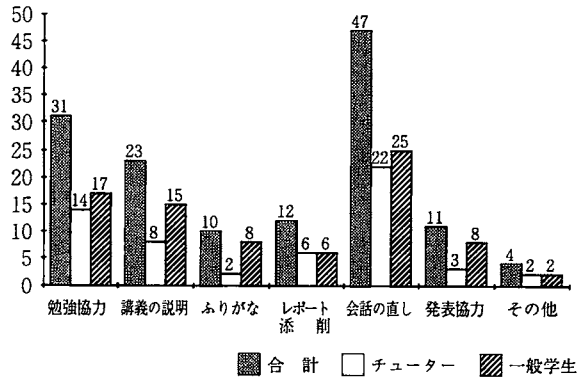



図７　日本語協力の内訳




### ３．２．４　非協力の理由

生活面での協力は，日本語学習面での協力に比べて低い。生活面で協力しない理由には，留学生側に起因するもの（51.9%），日本人学生側に起因するもの（18.5%），外的要因に起因するもの（27.8%），その他（1.8%）に分けられる。留学生側に起因する理由として，「必要がない」「忙しそうである」「性格上」「家族で暮らしている」「協力を要請してこない」など。日本人側に起因する理由として，「性格上」「協力の方法がわからない」「親しくない」などがあげられている。外的要因とは，「留学生と接する機会がない」「協力者が他にいる」などを指す。家族で滞在していたり，滞在も長い留学生に対して協力の必要を感じなかったり，留学生側から協力の要請がないなどの理由で協力を遠慮している日本人学生の姿が浮かんで来る。

今回のアンケートは，留学生が所属する研究室の日本人学生に対象を限定したにもかかわらず，「留学生と接する機会がない」「機会が少ない」という回答が12例もあった。

日本語面での非協力の理由は，図８のとおり，「留学生は日本語が上手だから」が最も多く20名で，以下「親しくないから」（８名），「自分が忙しいから」（４名）と続く。チューターの非協力者は，３名しかいないので，理由のほとんどは一般学生からの回答である。

図８　日本語面での非協力の理由

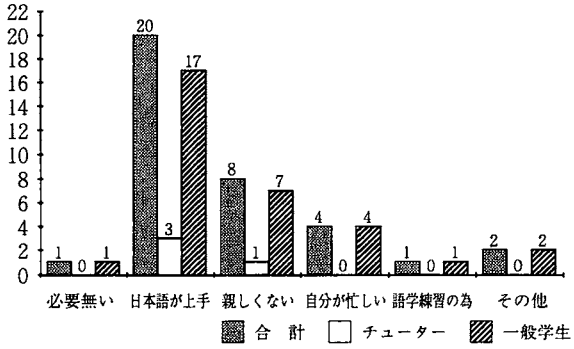
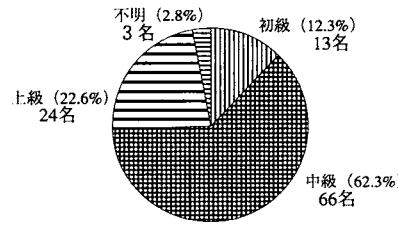



図９　留学生の日本語理解力
（総数　１０６名）

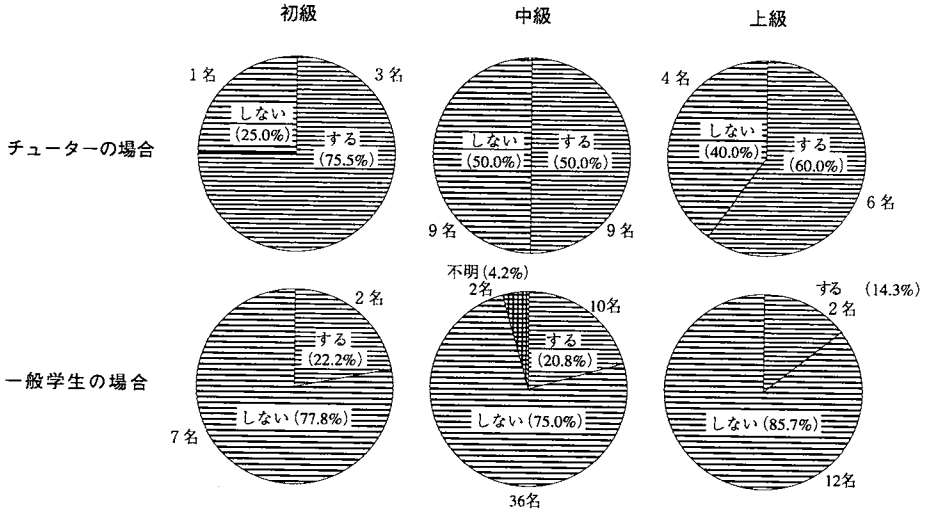


### 3．3　留学生の日本語理解力と日本人学生の協力

「留学生はあなたの話す日本語がわかりますか」「あなたは留学生の話す日本語がわかりますか」という質問に対する回答を，よくわかる3点，大体わかる2点，少しわかる1点，全然わからない0点と数値化し，両者を加算したものを留学生の日本語理解力とした。その合計点数によって初級（0～4点未満），中級（4～6点未満），上級（6点）に分けたところ，留学生の日本語力は図9のように，中級が66名（62.3%），上級が24名（22.6%），初級が13名（12.3%）となった。

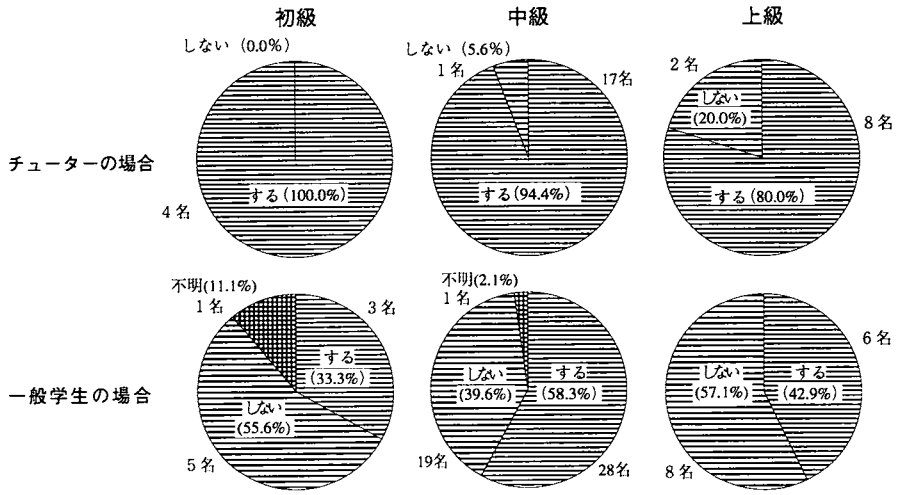
留学生の日本語理解力別に生活面での協力を見てみると，図10のとおり，チューターは初級で3名（75.0%）中級で9名（50.0%）上級で6名（60.0%）が協力をしている。これに対して一般学生は初級で2名（22.2%）中級で10名（20.8%）上級で2名（14.3%）と，全般的に協力の割合が低くなっている。

図10　留学生への生活協力




次に，言語面での協力を見てみると，図11のとおり，初級の留学生に対しチューターは4人全員が協力しているが，一般学生は3人（33.3%）しか協力していない。中級ではチューターは17名（94.4%），一般学生は28名（58.6%）が協力している。上級ではチューターが8名（80.0%）協力しているのに対して一般学生は6名（42.9%）の協力である。調査人数が少ないため信頼度は高いとは言えないが，この結果を見る限り次のような傾向があると言えよう。即ち，チューターはどのレベルでも一般学生の協力を上回っているだけでなく，最も必要とされる初級レベルでの協力が一番高く，中級・上級になるに従ってその度合いが減ってきている。一方，一般学生は日本語が大体理解できる中級段階の協力が一番多く，上級・初級レベルの留学生への協力は少ない。換言すれば，チューターの方が，留学生の日本語理解力に応じた世話や協力をしているといえる。

図11　留学生への日本語学習協力




### 3．4　留学生の話す日本語や日本語クラスに関する意見・要望について

回答数106のうち，記入は25名（23.6%），無記入は81名（76.4%）であった。記入された中で，「問題がない」と回答した人は15名，残り10名が何らかの問題点や要望を記していた。

「問題がない」とする理由には，「留学生は日本語が上手である」「日本語クラスは文法についてかなり詳しく教えてくれていると思う」などがあがっている。

次に，「問題がある」とする場合だが，その内容には，クラスレベルの問題・授業内容の問題・日本人学生への広報活動の問題・その他に分けられる。クラスレベルに対して，「クラスのレベルと留学生の日本語能力があっていないようだ」「工学部でもクラスを開設したら良い」「金沢大学以外の組織での日本語学習の追加を余儀なくされているのが現状。もっと金沢大学のみで問題解決ができないものだろうか」などの意見が出されている。授業内容に関しては「発音に少し重点をおいてもいいのではないか」「てにをはがすこし変な場合がある」「スピーキングに関していえば，あまり進歩がないようで残念」といった指摘があげられている。日本人学生への広報活動とは，これまで留学生教育センターでどんな日本語教育を行ってきているか外部に対して知らせる努力をあまりしてきていないことから，「日本語クラスでどういう授業が行われているかわからない。授業の内容を知りたい」という要望，「日本語クラスで出る留学生と日本人学生とのコミュニケーション上の問題点を一般学生に知らせたらどうか」という指摘など参考に値するものもあった。また，「内容が理解できなかった質問に対して，あやふやな答えをしない」という意見もあった。

## Ⅳ．ま　と　め

### 4．1　全般的な傾向

金沢大学で学ぶ外国人留学生の日本語学習のための調査ということで実施したアンケート調査で

はあるが，この調査によって留学生の姿と同時に金沢大学の日本人学生が留学生とどのように接しているのか，どのような協力をしているのかといった日本人学生の姿がはっきりしてきた。留学生と普段接している日本人学生は予想外に少なく，同じ研究室に所属していても講義・ゼミ・実験の場面で過半数以上が留学生と接触をもっていない。ごく限られた日本人学生のみがゼミや実験で留学生とほぼ1日中接している，という結果になっている。その際の言語は，理系の一部を除いて日本語がほとんどである。

留学生に対する生活面での協力は，「必要がないから」ということであまり行われていないが，日本語学習面での協力はチューターでは9割が，一般学生でも過半数が行っている。

### 4．2　チューター制度に関して

チューター制度については，これまで水谷（1990：p.92）が「チューター制度は，留学生に対してだけではなく日本人学生にも役立つという見通しと理想に基づいて作られたものなのであろうが，実際にはなかなかうまくいかない。成功だと言えない例の方が多いかもしれない」と述べているように悲観的な見方がされたり，また既にチューター制度が存在しているにもかかわらず，「金沢大学でも他大学のようにチューター制度をのぞむ」といった意見が当大学の留学生用のアンケート調査で出されるなど，うまく機能していない一面がある。この調査においても，留学生に親身に世話や協力をしている一般学生がいる反面，ほとんど留学生と接していないチューターがいるなど，それを裏付ける結果も出ている。しかし，全体として眺めた場合，チューター学生は一般学生に比べ，留学生に対し約1.5倍の接触時間をもち，生活協力に及んでは，3倍という高い結果を示している。日本語学習面での世話・協力も一般学生に比べ，チューターの方が留学生の必要度に合わせた内容の協力をしている。やはり，チューターは，一般学生より留学生に対する意識が高いといえよう。

### 4．3　理系と文系

予想されたことだが，理系学生は文系学生より留学生と接する時間が長く，約3倍である。理系では休憩時間やゼミや実験の時間に，文系では休憩時間，講義の時間にやや多く接している。理系では，場面によって日本語以外に英語が用いられる時がある。

### 4．4　その他

金沢大学の留学生の日本語理解力は，滞在の長い留学生が多いせいか，初級レベルが少なく，中級から上級レベルが多い。

## V．おわりに

この調査ではアンケートの対象を留学生が所属する研究室の日本人学生に限定している点，また回収率が50％であることから，この結果からただちに金沢大学の日本人学生全体について論ずるに

は無理な点があるかもしれない。しかし理系と文系別にみた留学生と接する時間・場面・言語の差異や，チューターと一般学生の協力意識の相違はかなり明らかにすることができたと思われる。

勿論，今回始めて実施した日本人学生用アンケート調査ということで，質問項目に不備・不足な箇所が二・三見つかった。この点は今後更に改善を重ねていきたい。

次に，今後への展望としては，以下の３点があげられる。

1）留学生自身，指導教官，日本人学生それぞれ個別に調査・分析をおこなった結果がでているが，これらを有機的にクロスオーバーさせた分析が必要だと思われる。それによって，留学生が真に必要としている日本語学習のありかたがみえてくるであろう。

2）日本人学生は留学生センターや，留学生向けの日本語授業に関する情報を得る機会が限られている。「留学生について知りたい」「日本語クラスに関心をもっている」学生に対し，もっと積極的に働きかけていく努力が必要であろう。例として，留学生，チューターを中心とした日本人学生，日本語講師などを交えたミーティングをコース開始の４月と年度末の３月に実施し，問題点や反省点を指摘し合い意見の交流をはかることや，集まった意見を何らかの形で発表するといった地道な活動が望まれる。

3）日本人学生から指摘があったとおり，日本語クラスをもっと留学生の実態に合わせる努力が必要とされる。具体的には，「留学生の所属するキャンパスで開講する（これは，初級Ⅱレベルと中級レベルでは行っているが初級Ⅰレベルでは城内キャンパスしか開講されておらず，工学部の留学生には不便であろう）」（注２）ことや「現在１クラス10名程度の定員を５～７名程度に減らし，よりきめ細かい授業を行う」などが考えられる。

最後に，この調査に協力して下さった日本人学生の方々，アンケート配布と回収の労をとってくださった学生部留学生係の寺井，岡田の両氏をはじめとする各学部の留学生窓口の方々に心より感謝の意を表したい。

注１：チューター制度に関し，「外国人留学生特別指導費取扱い要項」では次のように記されている。

この制度は，国立大学又は国立高等専門学校に在学する外国人留学生に対して，指導教官の指導の下に，大学等が選定したチューターにより教育・研究について個別の課外活動を行い，もって留学生の学習・研究効果の向上を図ることを目的とする。

注２：92年度前期は，このアンケート結果の要望に基づき，初級Ⅰレベルも城内・工学部の２か所で開講し，学習者のニーズに合わせた授業を行っている。

参考文献：

水谷修「留学生と日本語教育」『異文化間教育　４』1990，アカデミア出版会

日本人学生用アンケート

資　料

※もし研究室にチューターをしている（いた）人がいる場合，一部はチューターの方，他の一部は一般の学生の方に記入をおねがい致します。もし全くチューター経験者がいない研究室の場合には，二部共一般の学生の方に記入をおねがいします。

回答者（下記に関する個人情報は，研究以外には一切使用しません）

Ⅰ．（もしお差し支えがなければ）お名前をお書き下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

年齢は，　　歳

性別　　a）男性　　b）女性

Ⅱ．あなたの身分・所属学部・専攻を教えて下さい。

a）大学院生（　　研究科）

b）　学部生（　　学部・　　科）

c）　研究生（　　学部・　　科）

d）　その他（　　）

Ⅲ．あなたは，これまでに海外に長期滞在（3か月以上）した経験が，ありますか。

a）ある　　b）ない

a）ある　と答えた方におたずねします。

| 国名 | 期間 | 目的・身分 | 主な使用言語 |
|---|---|---|---|
| ＿＿＿＿＿＿ | | 0　観光<br>1　学位をとるため<br>2　教育・研究のため<br>3　語学を学ぶため<br>4　企業などの海外勤務<br>5　家族に同行して<br>6　その他（　　） | |

| 国名 | 期間 | 目的・身分 | 主な使用言語 |
|---|---|---|---|
| ＿＿＿＿＿＿ | | 0　観光<br>1　学位をとるため<br>2　教育・研究のため<br>3　語学を学ぶため<br>4　企業などの海外勤務<br>5　家族に同行して<br>6　その他（　　） | |

Ⅳ．知っている外国語を教えて下さい。

（　　語）（　　語）

質問

Ⅰ．金沢大学には，日本人学生が留学生の世話をするチューター制度があります。あなたは今，留学生のチューターをしていますか。

A）している。

B）していない。

C）今はしていないが，これまでにしたことがある。（　　年前）

A），C）と答えた方におたずねします。チューターをしている（していた）留学生の国名と性別を書いて下さい。複数の場合は，複数に関して書いてください。

留学生1　国名（　　）
　　性別（ a．男性　b．女性）
留学生2　国名（　　）
　　性別（ a．男性　b．女性）
留学生3　国名（　　）
　　性別（ a．男性　b．女性）

以下の質問では，チューターをしている（いた）人は，チューターの相手に関して，チューターをしていない人は，普段接している留学生に関して書いてください。

Ⅱ．　留学生と時間を共にするのは　合計　（　　時間／週）

その内訳は　A）講義　（　　時間／週）

B）ゼミ　（　　時間／週）

C）実験　（　　時間／週）

D）昼食時を含む休憩時間　（　　時間／週）

E）その他　（　　時間／週）

Ⅲ．留学生と接する際，主として用いられている言語について教えて下さい。

A）挨拶をする　（　　語）

B）雑談をする　（　　語）

C）ゼミでの話し合い　（　　語）

D）実験の際の指示，打ち合わせ　（　　語）

E）その他（具体的に書いてください　　語）

Ⅳ．今研究室にいる留学生に対する生活面や日本語面での協力・世話についておたずねします。（複数回答も可です）

※　生活面に関して，協力・世話をしていますか。

A）している

Aと答えた方は，次の設問にお答え下さい。それは，どのような協力でしょうか。

1　アパートさがしの手伝い
2　市内の案内
3　大学構内の案内
4　病気など緊急時の世話
5　その他（　　）

B）していない

Bと答えた方は，次の設問にお答え下さい。それは，何故ですか。

※　日本語面に関して協力・世話をしていますか。

A）している

Aと答えた方は，次の質問にお答え下さい。それは，どのような協力でしょうか。

1　日本語の勉強（宿題など）の分からない箇所を教える
2　日本語による講義の分からない箇所があったら教える
3　テキスト／文献にふりがなをつける
4　レポートを添削する
5　話している時，間違いに気付いたら直す
6　日本語による発表の準備を手伝う
7　その他（　　）

B）していない

Bと答えた方は，次の質問にお答え下さい。それは，何故でしょうか。

1　研究室では，日本語以外の言語（　　語）で会話がなされており，日本語は必要ないから
2　留学生は日本語が上手であり，教える必要がないから
3　留学生のほうから，積極的に近づいてこないから
4　留学生が，全く日本語を話そうとしないから
5　自分がうまく日本語が教えられないから
6　自分の研究が忙しく，留学生に日本語を教える暇がないから
7　面倒だから
8　留学生とは，日本語で話すより他の言語（英語）で話した方が，自分の語学上達につながるから
9　その他（例えば　　）

Ⅴ．留学生の日本語について，質問します。

A）留学生はあなたの話す日本語が
0）　全然わからない
1）　少しわかる
2）　だいたいわかる
3）　よくわかる

B）あなたは，留学生の話す日本語が
0）　全然わからない
1）　少しわかる
2）　だいたいわかる
3）　よくわかる

Ⅵ．留学生の話す日本語や日本語クラスに関して，御意見・御希望がありましたら，お書き下さい。

御協力，どうもありがとうございました。

## む す び

今回の調査で留学生の日本語学習について，留学生自身と周辺の人々の両方に視点をおくことにより明らかになったことも多い。留学生と特に大学院レベルの一部教官との間の日本語学習に対する必要度についての認識の違いもそのひとつである。多くの留学生が日本語の上達を希望しているのに対して，教官の中には博士課程では日常会話程度で十分であるという意見や日本語を習得することと博士号を取ることは時間的に両立は難しいとの見解もある。今後今回の調査結果をもとに，留学生が必要だと認識する日本語能力と指導教官から見たそれとの間にどのような違いが見られるかさらに深く探ることが次の課題である。その結果はカリキュラム編成などでの今後の留学生への対応に活用できることと期待する。

日本人学生と留学生の交流面においてもいくつか問題がある。今回の調査では，両者間で期待されたほど多く交流がなされていないことが指摘された。ただし，それは日本人学生も留学生も交流を持ちたいという意志はあるものの，お互いに交流を始めるきっかけがつかめないことによるようである。また交流の場で日本語が多く使われているという調査結果から，留学生の日本語能力の不足が交流の妨げになっているとも推測される。だからこそ留学生は，日本人学生とより多く交流の機会を持つためにも日本語を学びたいと望んでいるのであろう。

このように日本語学習の問題は留学生活の中で大きな位置を占めている。この調査を機会に，私たちは留学生の日本語教育に関する問題にさらに積極的に取り組もうと意を新たにし，まずは今回の結果を今後の日本語の授業編成やシラバス作成に反映させていきたいと考えている。同時に，留学生問題にかかわる大学関係者の方々にも日本語教育について一層の深い御理解をいただけることを希望する。

（文責　札野）